

昭和廿七年二月一日第三種郵便物認可 昭和四十年五月一日発行四十年五月号 (毎月一回一日発行) 創刊大正十三年通巻四五六号

証の雅集

麻生路郎☆主宰

五月号



nojin

No. 456

Forsoj ilugas trans la land - limon
THE SENRYU ZASSHI

兼題
慰安
株
襟
慌てる

本社五月句会

何をおいても出席しましょう。

いのちある句はそこから生まれます。

日時 五月七日（金）午後六時

会場 自安寺（〔211〕一四七八番）

大阪市南区千日前電停スグ北側

兼題「切れ味」(三句) 若本多久志撰

「悪女」(三句)
川村好郎選

吉田圭井堂選

「丘」(三句) 橘高薰風選

三題（当日発表）

清水白柳

句評

呈賞 ☆各題天位から路郎選により不朽洞賞

會費 百五十四

幹事 摩天郎・いさむ・南宗・文秋・庸佑・八郎・

与呂志・清人・すすむ・薰風・柳宏子・舟遊

★投句だけの方は郵券五十円同封
(五月七日着便)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雜誌社句会部

電・大阪(71)六〇八一



あなたの句帖として

ご利用あれ

★路郎好みに、すばらしく気がきいて
います。句会でお使いになるなり、抜けた句
の整理にお使いになれば、何冊かで、あなた
の句集の礎稿が出来ます。又柳友への贈答に
句会の賞品にも最適です。是非ご利用下さい。

一冊八〇円（送費二〇円）

大阪市住吉区万代西五丁目二五

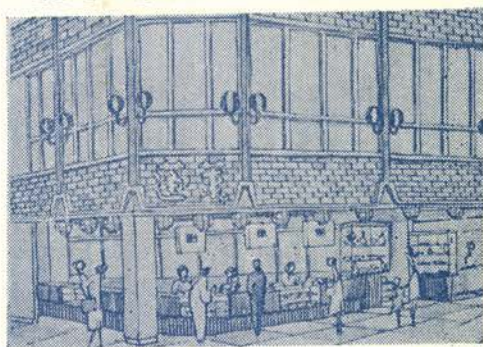
発行所

川柳雜誌社

電話 大阪(七二) 6081

振替口座 大阪七五〇五〇

豚饅・焼売



広 東 料 理

蓬萊

大阪 なんば

TEL (641) 0551 ~ 2

高島屋店・そごう店・天満京阪ストアー店

不朽洞句帖

麻 生 路 郎



三月三十一日入院

淋しがりやのボクを個室に放りこんだ

ドック入りこのボロ船をどうする気

部分品がもうおまへんと言われそう

人生を暗いところで探りあて

化石の魚をわれと見し眼よ

しがみつくほどのこの世でなかりけり

川柳雑誌★五月号目次

題字：麻生路郎・表紙：野尻弘

不朽洞句帖……………麻生路郎：(3)

日本晴れの富士に集うて……………東野大八：(20)

現代柳人録……………丸十府・岡田甫：(16)

川傍柳初編研究(二六)……………川端柳風・高須啞三味・前田喜代人：(10)

岡崎重義・清博美・藤井和雄

近作柳樽の選をして……………川村好郎：(34)

迷亭終焉記……………高須啞三味：(24)

集 鯉幟又はメーデーの思い出……………多志志・圭井堂・緑之助・雄々・日満・久米雄・与呂志・恵二朗・静水・明朗：(32)

明治川柳と風俗……………奥津啓一朗：(40)

江戸川柳と紋章……………阿達義雄：(26)

柳志寸言……………本多柳志：(20)

川柳太平記……………富士野鞍馬：(21)

大萬川柳「小切手」発表……………六花氏の巻：(41)

不朽洞の人々……………(39)

川柳塔……………麻生路郎選：(4)

同舟近詠……………諸家：(29)

近作柳樽……………麻生路郎選：(16)

方円帖……………北川春巢選：(30)

金泥集……………麻生路郎選：(23)

入門講座……………清水白柳：(22)

各地柳壇……………(42)

★柳界展望……………(38) ★不朽洞会から……………(39)

一路集「窓越し」……………正本水客選：(36)

★柳樽室……………金井文秋選：(46)



川柳塔

麻生路郎選

大阪市 市場 没食子

平和と言う名に自己犠牲しいられる

口下手で内気よう手もふり上げず

父の靴かかとも斜にちびたまま

生きるのに面ン子はどうに捨てていた

大阪府 川村 好郎

縫いたてを夫に見せているも春

貸さぬとも貸すとも言わず庭へ下り

爛けてんかと言うてほしいかちり酢蠣

歌手さえも若手の時代と論す妻

やとなさえ法螺吹き出したとこで立ち

高槻市 若柳 潮花

弟子と言う名がほころびを縫うてくれ

波と寝て貝殻春の夢を見る

煙草の輪孤独の壁を這いあがり

大阪府 西 いわを

病上りソツとしといてくれと言う

春が来たとして金魚動き出し

忍従の姿で猫はうずくまり

✓ 附合うていんのに死亡通知来る

大阪市 北川 春巢

暴力団こんなところへも顔を出し

霊柩車前に行くのが追い越せず

給食を残して帰る子に育ち

大阪市 後藤 梅志

津々浦々貧農影をひそめしや

五右エ門が家中好きになるテレビ

旅役者座長も握手して別れ

能面を語るは若い教授なり

ボス猿を見る資本家にそっくりだ

ハワイ 羽佐間 柳葉

芸術に満ち足る時のない修業

金策へ無いよと先手打たれたり

死んでまで金が物言う釈位なり

堺市 吉田 圭井堂

金策のメドついたとたん醒め

パチコンで傷めた指を労災に

甘党の役人殿で処置がなく

裁判で言えと白バイ取り合わず

しぶい咽喉さんざ苦勞を妻にさせ

一つしかない栓抜きで順を待つ

賽銭は拝観料で相殺し

防府市 長野 井蛙

儲けてと目先の慾が後手を取り

汽車が出た途端パチンコ出がとまり

冬木立春を信じた丸裸

無防備の悲しさ中立許されず

行商の臭いを蠅も追うて乗り

岡山県 直原 七面山

慰めの言葉へ女の肩が揺れ

お世辞混りの皮肉がこたえ

鳥取市 河村 日満

つかくしわが娘も恥ずかしがらず立つ

新幹線車中は眠るばかりなり

倉敷市 木村 千容

杉の木の花粉がさそう春の風

発作もうくる刻とノイローゼ

倉敷市 田垣 方大

退屈な講義講師の似顔かき



唐紙を足で開け閉めセーラ服
女医さんに胸毛挑戦する如し
酔いでやれば老父は涙ぐんでいる
出世コース女の一人や二人

加賀市 野村 味平

甘酒にしたらと妻の夜が冷え
開店へいらぬ物も一つ買い

大阪市 木村 水洞

利用される部分が僕にまだ残り
食慾と同じ程度に慾も減り

子に甘いテレビの父を例にとり
ドル箱の意味で父親いたわれ

月ヶ瀬梅溪

ダムになる噂気にせず咲き鏡い

米子市 小西 雄々

弟子が剃り二度と行きたくない理髪

賞金は他人が貰うクイズを見

急患へ晩酌の腰重く上げ

大阪市 山川 阿茶

車掌迄よろける路へ憤り

天王寺深山にあればなど思い

きやべつも又上るだろ此処も宅地に

加賀市 那谷 光郎

儲けにはならぬ風致へビルを建て
ゴキブリが貧を覗いた妻の夢
褒状の数欄間に役場吏員老い

大阪市 福井 野迷路

ベトナムの遠吠え段々近くなる

在学求人青田買いと恐れ入る

片手だと言われ一桁まちがえる

岡山県 浜田 久米雄

どや／＼と来れば一升瓶が要り

別れ話になった家夕灯がつかず

文化生活物価値上げの渦の中

大阪市 菊沢 小松園

金のあるうちは大阪よいところ

あひるの子飛べる翼と信じ切り

鳴る時になって釣鐘見上げられ

晩めしは外で喰べます小金貯め

囲われて旦那の好きな柄を撰り

愛することの難さよ無理心中

防火週間中の火事派手に燃え

出雲市 尼緑 之助

三女 結婚

結ばれる祝詞へ親として拍手

奈良にて

もう一度来いと古都にも雪が降り
春の丘トリリスのびんを投げて立ち

大阪市 水谷 竹莊

集金へお女将も行く金詰り

井池は焼けてもそろばん手ばなさず

添いとげるまではと二人けちになり

京都市 大鶴 喜山

花見酒妻まだ若いものを持ち

その時ずばりこんな頓智が出ていたら

好きだとも書けず四ツ葉を封じこみ

ここからが二人こさえた路になり

尼崎市 小林 文月

優良技能者表彰式

表彰状以下同文でも拍手わく

岡山市 服部 十九平

焚火の輪話の落ちたところで散り

大胆なデザイン審査が二派になり

病葉も落ちる順あり神の意図

岡山県 田村 藤波

李ラインは通用しない横車

同穴を誓った方が先に逝き

児島市 本田 恵二朗

瓦また落ちて斜陽を物語る



教養のほど丸出しに美女のガム

京都市 松川 杜的

等持院拝観

尊氏を見直して来た等持院

堺市 高崎 雄声

台風目のようラッッシュに空いたバス

宿浴衣湯さめもうれし二人づれ

せっかちも車の流れいかんせん

島根県 藤井 明朗

ふぐチリで心中仲居驚かし

差向ひ雪しんと帰えらせず

乾盃の上役次の場所が待ち

倉敷市 野田 素身郎

春や春恋の橋渡しに多忙

痛快に未っ子妻をやりこめる

コマーションで知った知識をふりまわし

芦屋市 丸川 初甫

風邪気味で柔な目をする主婦の座よ

起きてはガス寝ては電気冬の陣

残り福ばっかり食べて子沢山

岡山県 池田 古心

可愛さが放任主義にする鯨

恋強し犬は鎖をひきちぎり

家柄を誇って明治の鯨する

大阪府 早川 清生

日々無事に勤めて市議の顔知らず

捨てられて泣き母の死に涙なし

秀才を母たわし買う用に出す

老妓豊饒心にくいつかの位牌

奈良市 宮口 笛生

火事怖しなにもないけど何も残さず

二十余万円親には重きピアノ買う

大阪市 枡本 露児

骨董屋猫の茶碗に似た模様

神戸市 仲どんたく

ほこり出ぬ帳簿が税務署もの足らず

欠勤の電話へ咳も二つ三つ

客送り出したついでの焼焼屋

デパートへ五枚靴こはきを買お供

平田市 久家代仕男

友人の死に寄す

無情とや少し見ぬ間に絶えぬるは

ものさしの尺度を越えた支度金

農村に若手がおらぬ昼の火事

大阪市 本多 柳志

音楽喫茶悪を企むとこでなし

論議などどうあろうとも紀元節

保証人二人も立ててお茶を汲み

制服を脱げば親せきほっとかず

習字塾誰にも読めん字を教え

出雲市 原 独仙

一人占めの座席ヘドヤ／＼観光団

餌代を稼ぎに「行つていらっしやい」

お見舞の返事電話は流感かぜの声

嫁してなお役立つ娘に職をつけ

父ちゃんが居るのに只今おかちゃん

男など嫌いというにルージュ濃し

岡山市 江国 幽谷

猫にやるんですとイワシ買うて去に

名刀へ座りなおしてから讃辞

明日は明日今日をはたいた酒の味

震度3隣が夫婦喧嘩中

西宮市 野呂 鶴汀

客の前子は睨まれて箸を置き

血は人を呼ぶのか同じ場所の事故

ウイंकをしたら他人の眼に届き

父ちゃんの二号醜婦で気にならず

新潟県 高野 不二

風邪は万病のもと薬は命とり



納めるじやなくて取られる所得税

高砂市 吉原 紅月

愛する者の足音聞き分けるのも女
儲けるとなれば百円値打あり

人間が増えてみどりかへって行く

甥 死亡

納棺へ好きだった唄かけてやり

子守唄音痴の父を笑うまい

聞き分けがよすぎて親を悲しませ

大阪市 魚住 満潮

続 西成界わい(五句)

父母を説きふせてパーテンと世帯

二十年遊んで食べ来た男

一家心中春がそこまで来てるのに

自転車を通う雇われ社長なり

チチキトクまた通帖0になり

愛媛県 村上 旭童

温室で咲かせてまでも春を恋い

老化防止とかでやっぱり稼ぎに出

好物は目刺名士といわれても

十四五年したら主人となるいけず

いい日和屋根の太工に春の空

皆売って町へ来いとは殺生な

鳥取県 福田多可志

鳥取砂丘スキー場へ遊ぶ

砂山のスキー安心して転び

雪けて喜んで行くランドセル

末っ娘のおねだりへ一と口返事なり

高槻市 傍島 静馬

入学さえ出来れば何科でもよろし

すまなそうに値上げ言うてくご用聞き

子沢山灯ともしごろに行く市場

留守番へ凄雷鳴り止まず

笠岡市 木山 遠二

紅一点心臓強く美しく

訃報見てまだ生きて居たのがわかり

代筆の字が稚拙なまよろしけれ

大阪市 仲谷 ハナ子

新家庭日記書く妻のういういし

松がとれそれから待合花もなく

布施市 森下 愛論

ホステスの勘は金主へ向を替え

口説かれてからの白粉のりのよき

定年も近づき呼び捨て難くなり

掴った万引玩具一つ抱き

大阪市 河井 庸佑

血圧があがると叱ると母なだめ

五十代目生まれ親方ほっとする

やがて嫁く娘の気ままきいてやる

大阪府 谷沢 好祐

歌手弱し暴力に泣きベンに泣き

パパの工作ブザー付けるに小半日

使わねばならぬ予算を年度末

値上げ賃上げ値上げ賃上げやりきれぬ

俺について来るものは唯影だけか

愛媛県 榎 紫光

生字引重宝がられ邪魔がられ

血の遠い人がお通夜でよく喋べり

釣れもせん池も立て札たててあり

団体で来れば威厳のない課長

妹のように思うと誘惑し

青森市 工藤 甲吉

旧友も浦島太郎ほど変わり

銅鑼鳴って鳴って破れる溜涙

銭別がやつと間に合う発車ベル

君が代は千秋楽に聞けばかり

迷うてばかりミスコンテスト審査員

大阪市 今西 章雅

恩給も欲しい汚職もしたい顔



木の芽立ち元親分が僧衣で来

頂上策戦やくざと対決してる警察

京都市 室井 八九寸

イメージの月を攪乱した写真

爪色は桜古稀にはみえぬ母

多芸多能慕い惜まれまだ間借り

岡山県 横山 一声

入れ智恵の聲が受話機へもれてくる

観光団皆んなお口がうごいてる

セールスが卒業祝い言いに来る

予備校の所在も聞いておく入試

小松市 関戸 宗太郎

脱税がばれて春闘強硬なり

社長派へねがえり人事移動待つ

商敵に押され専務派盛り返し

石川県 高山 涼髪

山笑いうぐいす鳴いて故郷まずし

北陸の情緒かつららさげたバス

パチンコのプロ頭刈るひまもなし

病院の匂いのがれる試歩の風

母ひとり娘ひとり小さい鍋煮える

美祿市 安平 次弘道

時間待ちサクラのように香具師に立ち

押し込んで駅長ほっとして送り

賃下げと物価値上げへ身が細り

新聞で犯人は捜査の裏を逃げ

春遠からじ冬物一掃大売出し

国会の善処は何もせぬことか

諫草市 川岡 雲眼子

上を見て中見て下見て銀座往く

息切って昇ればエレベータ有るビル

外人らしく羽田のロビーに喫う

布施市 本多 清人

救急車すでに市民は驚かず

爪染めて喫います吞みますレディです

番台に呼び出しされて抱かされる

富田林市 浅川 八郎

人を世を避け得た笹の孫の守

せめて死屍と頬紅たたく綺麗な手

チャンスよりピンチの足が速かった

稚氣脱し得ぬだけにこわし反抗期

岸和田市 内藤 きさ子

昼酒のサカナにされた生返事

テレビの騒音の中で一生終りそう

ゴミ山に埋れ立札たおれそう

折詰の紐で国旗の竿を吊り

三泊の旅へ小猫をあづけられ

ケチャップの散乱事故を派手に見せ

死体もう雪山讃歌唄わない

団体でゆけば檜山も恐くなし

ボンと出すキャッシュへお茶がつまりかけ

青森県 木村 涼人

横綱が勝てば勝ったで物足らず

アンブルの恐怖富山で我慢する

一人娘高校進学

江り止め二股かける一人っ娘

合格を祝福されて買わせられ

倉吉市 奥谷 弘朗

あの頃の闘士が事務の隅で老い

娘の不満行って来ますを言わず出る

父ちゃんも恋愛結婚かにあわて

富田林市 岩田 美代

橋の上同じなやみの友と居る

あの友もタデ食う虫とそうたらし

天井へあらゆる呪詛を吐いてねる

兵庫県 遠山 可住

よくしゃべる女だ喰う手休めずに

蝸牛今日一枝を動き出し

ハイコレと輪ゴム手首にあるも女



兵庫縣 河原みのる

或る日の老妻はんまに憎んでいるやろか

職人のあまりの嘘に吐立たず

兄イチヤンが兄貴となって他人めき

姫路市 隠岐不酔

選挙前犬も一票の顔に見え

醜税吏去年の額に毛を生やし

有為転変今年の風邪は阿呆がひく

大阪市 田中十方

手術後は外科医の口を待つばかり

鳥取県 清水一保

何糞と不利な立場に意地をはり

神仏の加護も頼んで理を通し

出雲市 中川晃男

人の為流す涙が残ってた

父さんにねだれと母も後を押し

上げ底で土地の名産名を落とし

松江市 柳楽鶴丸

若後家へ興味本位の噂立て

老ラクの恋スロースロークイッククイック

富士山を過ぎて皮肉な雲が切れ

春の躍動山も川も草も木も

京都市 都倉求女

春の雪二人へとまっては溶ける

廻り道してのポストを忘れかけ

新任の課長下座から酌ぎに来る

兵庫縣 大江秋月

酒だけは横綱という名でとおり

冷戦を子供も知って早く寝る

栄転が二重世帯の苦になやみ

人口過剰土の下にも伸びて来る

門限は只決めてある夜の旅館

今治市 越智一水

御見舞の客を待たせてパフの音

雛段へ母の料理は田螺和

遠足に捨てられているげんげ束

大阪市 森川すみれ

一時をビエロとなりて人と坐す

真直ぐに明日をみつめて胸を張り

新居浜市 小林孝正

冷戦の夫婦へ子まで黙りかけ

ベテランと言われて淋し女事務

放つとけと言うては見たが子の非行

丁稚から叩いた自信が世に合わず

熊本県 有働芳仙

ハイウエイの底で先祖は眠られず

青春のはけ口ベトナムへ行きたし

枚方市 宮川珠笑

面あての辞表あつまりり受理される

崑崙くかっぱに似てる娘にあわて

資金難社長に四面楚歌つづく

京都府 西村句楽坊

雑談に法話もまじる寺の夜

無一物その一物が捨てきれず

命有る句に活禅をひろい上げ

大阪市 羽原静歩

学界は出しやばり天理教は引き下がり

「日曜散歩」というロハの旅をする

寝床から浮世へ靴下はきかえる

竹原市 杉原愛鳩

半額セール伝染病の如き街

流行のないものから娘の支度

椅子カバー真白ひまな証券屋

フアッションショーにこの娘も出る自信

新聞へ池田のイの字も出なくなり

小鳥屋が小鳥のような顔になり

BG一年社用で済ます知恵がつき

卒業おめでとう議員からハガキ

就職のあとをさみしい母一人



川傍柳初篇研究 (二六)

丸 十 府 高須啞三味
岡 田 甫 前田喜代人
○ 岡崎重義
川 端 柳 風 藤井和雄

309 焚げんあらた品川の尻がわれ

龜遊

藤井二例により海晏寺の紅葉を口実に品川に遊んだ所仏罰たちどころにあらわれ、女房に知られてあなかしこ、と云ふ所と思う。

海晏寺真赤な嘘のつきどころ (タル四)

高須二「靈驗あらた」だから、目黒不動の罰だろうと、柳雨翁は言っている。

座敷牢目黒の罰と母は言い (明和)

を、三面子先生はあげている。「尻がわれ」に、何か匿されている気がする。

前田二海晏寺も目黒不動も品川に近いが、

「靈驗あらた」からは目黒の感じがする。

「尻がわれ」は、いわゆる悪事露見というところ。うまい句である。

岡崎二高須氏の伝える柳雨説、目黒不動詣りの帰りに品川で遊んだこと、たちまち露見、という説に賛成。

清二目黒不動説に賛。ドッコの滝で垢離を

取ったのであろう。

丸二贊。

岡田二目黒不動説に賛。清氏もちょっと触れたように、目黒不動の参詣人は、身褻(みそぎ)などもしたくらいで、降魔の剣を手にした不動様でない「靈驗あらた」が生きて来ない。

高須二その通り、不動尊の怒りに触れたのは、自分がダシに使われたからで、この品川に遊んだ男は、水ゴリなどは取らず、不動詣りを口実にしたに過ぎぬ。そこで「靈驗あらた」なので、それよりボクは「尻がわれ」にコダワるのだが、たゞ「露見した(バレた)」だけであろうか？

310 後の月五寸角からさへわたり

鼠弓

藤井二前月の月には吉原で大尽遊びをしたのも今は夢。今は座敷牢で蟄居の身。座敷牢の五寸角の柱の間から皓々とさえわたる十三夜の月を見ながら、感慨無量、好句である。

る。

川端二吉原では、八月十五夜を見て、九月十三夜(後の月)の月見をしない客を、片月見として忌む習慣があったので、座敷牢から見ると、殊更に訝えてみえたことだろう。礎解贊。

高須二「片月見」をきらったのは、そういうことを言って、客を多く引き付けるための、遊里側の一種の営業政策であったが、客の方にすれば、少しでも相手に好意を見せてもらうために、他の客との比重も考えて、なるべく「両月見」にした。しかし片月見ごくく悪い首尾と見え

(タル八)

というように、主題句の如き有様となった客もいたであろう。従って、前句は目黒不動の罰だが、この句は横目で通った浅草観音様の罰という所か？

丸二贊。「五寸角からさえわたり」は情景かね備わって佳句。

岡田二同。

311 きやらへ穴六ッ明々ても歯がたゝず

眠狐

藤井二吉原三浦屋の高尾太夫に夢中の伊達候、キヤラの下駄(穴は六ッ)をはいた豪奢な遊び振りも、高尾の愛人の一浪人島田に歯がたゝなかったとは、江戸ツ子さぞ溜飲上げた事であろう。下駄の歯にかけて「歯がたゝず」と云ったまでの事。

高須二下駄の穴は、片方が三つだから、一足で六つ。

伊達なと唐木へ穴を六つあけ(文化)で、つまらぬ句だが、下駄だから「歯がたゝず」としたのなら、なおさらつまらぬ。

丸二贊。高須説の如く、まことにつまらぬ句。

岡田二ところが、此の句の「六ッ」は、伊達陸奥守の「ムッ」をきかせた点に、もう一つ作者(眠狐)のねらいがあったのであるが、それだけに狂句臭が強く、つまらぬ句たることは同意。

312 げん金にけいはくをいふ呉服店

水砥

藤井二商人のうちで呉服店はど、女性的におべんちゃらを云う商人はない。買手に対してはあらゆるお世辞を振りまく。「けいはく」は「軽薄」で、うすっぺらなおべんちゃら。最近のように月賦払いの時は、キヤツシユの現金払いにペコ／＼する風景もよく／＼見上げるが、これは別の問題だ。

川端二当時の呉服店は、掛値や掛売が多か

ったので、商人の金に対する赤裸々な姿を詠んだ句である。正札現金売買は、越後屋が元祖だと云われる。

高須「この丁（18） 最初の句

297 江戸中の家数を知らぬ呉服店

と同系の句で、呉服店（越後屋）の番頭を詠んだ句であろうが、かけひきのない、それだけの句。

丸川端説。掛売りを普通とした当時としては、実情であつたろう。

岡田「同。

藤井「現金」を形容詞と解して、ちょっと見当違いをした。

313 大将と見へやうがなと暑ひ事

一 甫

藤井「虫干しで、先祖伝来の鍔を得意気に着て、どっかと腰をかけ「どうじや、大将と見えるだろ」と、見得をきった所。実にお暑い事である。話しは別だが、今は帝国軍人の軍服が、古着屋に寂しくぶらさがっている。

高須「土用干し風景だが、古来土用干しの句は多い。

振袖の次にいくさの土用干し

（タル十三）

で、一年に一度は出されるものに、いくさ道具のあったのも、当時のこととして当然であつたろう。ところが

武者一人叱られている土用干し

（タル四）

甲冑を帯したとこへ暑気見舞い

（タル八）

で、どうも出して見ると、着てみたくな

るものらしい。

清「賛。だが質問一つ——これは、武家に於ける虫ほしであろうが、天下泰平の世とはいえ、このように武具がもて遊ばれたものであろうか。

丸川賛。高須説の如く、出せば着て見たくなるのが人情、これをつかまえての川柳子の創作で、あながち「武具をもてあそんだ」とは考えられない。

岡田「先祖が武士でも浪人し、子孫が商家である場合もあろう、要は天下泰平の態。

314 薄田八月見も仕廻ひかねぬ所

眠 狐

藤井「豪傑岩見重太郎も、出世して薄田隼人になると、徳川家康一辺倒の川柳子には評判がよくない。曰く「岩見重太郎、秀吉に仕え五千石、慶長十九年大阪冬の陣に薄田隼人兼相と称し、穰多崎を守っていたが、勇をたのんで備せず、出でて娼家で酒を飲む。元和元年夏の陣で河内路を防ぎ、伊達政宗の将片倉重綱の手で死んだ」と。薄田の陣小屋へ来るさがり取り

（タル八）

「さがり」は茶屋の掛取りだから、無銭遊興もしたらしい。

す、き田は冬はばかりの女郎かい

（タル二二）

薄田は遊んだだけがとくに成

（タル十七）

遊軍といふは薄田隼人なり

（タル十八）

従って、川柳子は「冬の陣ですっかり遊び狂った隼人だもの、夏の陣落城がもう少

し延びて、もう少し生きながらえたら、十五夜・十三夜と月見も仕廻ひかねなかった奴だ」と、考えたのだ。

正確に歴史的には、冬の陣は慶長十九年十一月・十二月（一六一四年）夏の陣は元和元年四月・五月（一六一五年）だから、隼人は月見どころでなく死んでしまったわけで「冬ばかりの女郎かい」が正解であるが、とまれこれが当時の「外人部隊」の実相だったであろう。

高須「柳雨翁は「月見」は「薄田」の「スキ」に掛けただけだろうと言っているが、それでは狂句じみる。礎解に賛。

岡崎「賛。

居つゞけというち穰多が崎は落ち

（末四）

丸川同。

岡田「同。川柳に多い後世の想像句。

（19才）

315 気の毒さ刀を持って追ッかける

一 甫

川端「刀は菖蒲太刀であらう。端午の節句に子供の遊ぶ玩具で、反りの多い木刀で、床の間にも飾った。

菖蒲太刀乳母どっこいと受留める

（タル一〇）

来客に子供がふざけているのだが、親にしてみれば気の毒な気持である。

高須「生酔い侍が、女を口説いている場面ではなからうか？「気の毒さ」は、両方にかけてあると思われる。

前田「侍でも誰でもよいが、とにかく生酔いがまだ酔わないものを、刀をもって追ッ

かけている情景と見たい。「気の毒さ」は、素面に対しての同情がのそかれて面白。既出

276 よらばきらんず勢に下戸こまり（16）と同趣句。いずれの句も、まだ刀をぬいていないところが妙。

岡崎「たゞ、生酔の酔態でよいのではないか。

清「岡崎氏の如く、生酔の酔態と考えているのだが、まだ十分納得しきれずにいる。何か古事に関係があるのではないか、という気もするのだが……。

藤井「岡田の現場を見つけた時は、二人を重ねて一刀両断にするもよし、金五両の示談でもよし、いずれをとるか、亭主の勝手次第とは、江戸時代の風習だった。

まさかと思った現場を発見して、切るか？ 金か？ に迷ったこの亭主、ついに男の意気地と前者を選んで、おっとり刀で逃げる間男を追いかけた。これを見た第三者の句だけに「気の毒さ」が効いている。

丸川諸説それぞれ面白く拝聴したが、自分は、この句を品川に遊んだ山さんの朝帰りとして解している。高輪で医者に化けて、一夜の酔をつくし、翌朝帰るとき、差しつけぬ一本を忘れて出た。妓楼の若い者が、その置き忘れた刀を持って追ってくる。せっかく化けた医者の皮も、こんな事でバレルかと、気の毒でもある。また追いかけてくる方も気の毒——もちろん「医者化けの山さん」とは、先刻ご承知ではあるが。

岡田「丸先生のいわれたように、「気の毒さ」という上五からして、刀を忘れていっ

たのは差しつけぬ人……ということになる。生酔（大酔）説が数人あるが、その場合は武士ではない。メガネをかけてる人がメガネを忘れぬように、武士はいくら酔っても、大小を忘れることはあり得ぬ。まあ町人の年礼客あたり……。だがそれでは、「気の毒さ」の形容がふさわしくない。とすれば、医者に化けて、脇差一本をお義理に差した坊主の遊客あたりがもっとも適説ということになる。

高須Ⅱ医者に化けた山さんとは、ちょっと気がつかず、軽く「生酔い」と思ったのは軽卒。「朝歸りの山サン」で「気の毒」がよく効く。御明解に敬服。

岡崎Ⅱ両先生に脱帽。古川柳のむつかしさと面白さが象徴されていて、今更に感服。

316 お見立く／＼と醬油樽を下り

魚交

川端Ⅱ「見立て」とは、自分の買う遊女を選定することだが、「醬油樽」がわからない。御教示を乞う。

高須Ⅱ根津のぎょう醬油の樽に腰を掛け

(タル五)

の醬油樽から立つのだから、根津（岡場所）風景というところであろう。

清Ⅱ根津のぎょう説に賛。ただし、醬油樽と根津の關係がわからない。根津の遊客は、大工が多かったというが、それとも何か關係があるのか？ 御教示を乞う。

藤井Ⅱ高須氏引用の例句により、高須説に賛。ただし、醬油樽と根津の關係は、清氏

同様に不明。

丸Ⅱ高須説賛、醬油樽と根津の妓夫については未考。岡田先生にお願いします。

岡田Ⅱ根津は、江戸の岡場所（私娼窟）で第一位であったが、深川がボツ興して第二位となった。大工客が多かったのでもわかるように、妓樓の作りも古く汚く、安直だった。従って、呼び込みの妓夫の坐る妓夫台も、醬油樽で間に合わせていたところに、安っぽい根津らしさがあった。呑み屋にはよく腰掛酒樽を使用しているところがあるが、呑み屋とすれば、根津はいわば大衆酒場といった格なのである。

高須Ⅱ「醬油樽」にコダワツた諸君は、岡田説で納得されたと思うが、椅子というものが余り民間になかった江戸時代、スツと立てるように腰かけているには、樽が一番手頃であった。それで、高価な酒樽より、庶民的な醬油樽が使われたので、岡田先生説通り、如何にも庶民的で、岡場所の感じも出ていと思う。

317 にが笑ひしい／＼平を嘗て喰

梅枝

川端Ⅱ「平」（ヒラ）とは、浅く平らにつくった椀のことで、平椀といわれる。

愛想にいったののに平を替へ

(タル一三)

出された馳走に対して、容器の平椀を替めるということは、おのずから味も想像されるというものである。

高須Ⅱ「平」は「平椀」だが、この場合

は、その容器を「ほめ」ているのではなく「お平」の味をほめて「食べ」ているのである。「ほめ」のために重ねて出されて、「苦笑」しながらも、「ほめ」た手前ことわりもならず、重ねて食ったという句だが、柳雨翁は「前掲秋田落」の姉妹句と言っている。或は然らん。

前田Ⅱ出された馳走はうまくないが、いれものの平をお世辞にほめて食べている。「にが笑ひしい／＼」は要を得ている。

岡崎Ⅱ高須氏紹介の柳雨翁説に賛。佐竹侯は大落の自慢を、あり得ざることと嘲笑されたので、領地の百姓に命じて大落を育成させ、諸大名に供して、溜飲を下げた、という伝説にもついた故事句。その大名たちは、大落を否定していた手前「にが笑ひしい」ながら、平椀の落を賞味しなければならなかっただろう。「にが笑ひしい」は落のアクとの縁語でもあろう。

丸Ⅱ岡崎説詳解。前々丁（17）の

292 にが／＼數も御咄をかつけされ
と同様の句。

岡田Ⅱ岡崎氏の秋田落の故事は、厳命して大落を急遽秋田から取り寄せ、諸大名に届けたので、食べさせたのではなかったと思っているが……。もし食べさせたのなら、岡崎説が正解。少し調査して見る必要がある。もし馳走したのでないとすれば、大久保彦左衛門の話がからまる。將軍の鶴の吸物、即ち菜っ葉ばかりの故事あたりかも知れない。

高須Ⅱ「或いは然らん」とは書いたが、ボクも柳雨説はとりたくない。平明に解した方がよいと思う。平明な句を、あまりもってまわって解釈するのは、ある意味で古句にとらわれているからではないかと思う。どつちでもよい場合は、日常的な解の方がよくはないか。

岡崎Ⅱ岡田先生説に関連して——「大落を食べさせたのではなかった」としても、柳人が「諸大名が食ったであろう」と想像して面白がった句と解釈できぬか。

藤井Ⅱ岡崎説に賛。柳人は想像が好きで、歴史的真相には余りこだわらないからだ。また平明そうに詠んで、そのウラに変化をかくしているのが、古川柳の味でもあるからだ。

丸Ⅱ古川柳家は、どうもコジツケる癖があるから、あまり平明には考えられぬ。

御いきどおり献立にちえを出し

(安四義一)

みけん疵所をふきの御料理

(明七・八・二三鱒舍評)

と、料理もして食わしたことにしている。

318 茶飯たきながら押入片付る

門柳

川端Ⅱ「茶飯」とは、茶を煎じた湯で炊いた飯で。塩を少量加えるのが定めてある。

——今日は大掃除でもあろうか、簡単に茶飯を炊く間に、押入の中を片付けている風景と思う。

高須Ⅱ「茶飯」の句は、本篇には幾つかある。

茶飯が過ぎて三重が苦しう

(23オニ)

しかも、作者も同じ門柳である。また押入で扇で湯などほりこぼし

(同ク四)

があり、これも門柳の句である。門柳自身素義(素人義太夫)に寝っていたか、周囲に素義人種が多かったのであろう。また、同想句に

茶飯にはなると勘当場を語り

(タル一三)

があるから、素義の句に間違いない。

前田Ⅱ既に出た(16オ)

267 玉だれの内へ茶飯を食って入り

で述べた通り、素人義太夫風景。その準備である。

岡崎Ⅱ旦那が素人義太夫をご披露するというので、茶飯を炊く傍ら、押入れを片付けの舞台造り——に賛。

清Ⅱ茶飯では、前回駄労働を出して、失敗したが、本句は前解に賛。

丸Ⅱ諸説に賛。落語の「ねど」なども連想される。

岡田Ⅱ同。

319 水引でいわいたやうに息子

魚 交

川端Ⅱ「水引」は垂幕だと思いが、助六のような粋な恰好を表現したものか、仕事もせずかしまっていることか、さりとて屋敷牢とも思われず、不明。

高須Ⅱ「水引」は、慶弔に差し出す品物に掛ける紙糸、息子があらたまって帯をしめた恰好が、その水引で結んだようだというので、まだ初々しい息子の様子が、可愛くも、おかしく見えるのである。佳句。

前田Ⅱ高須説に賛。元服風景にとりた。

藤井Ⅱ賛。「水引でいわいたやうに」が、適切、よく効いている。水引は一度使うとのりがとれて、二度目はあの新鮮さがなくなる。従って前田説の元服とみたい。

丸Ⅱ単に衿元をきちんとそろえ、胸高に帯をしめた息子の格好で、元服とまで見る必要はない。当時、吉原通いなどする息子の粋な様子である。

岡田Ⅱ丸先生と同解。洒落本などに出てくる当時の息子の姿は、こんなものであった。一例を示すと、「仁勢物語通補抄」(天明四年)という洒落本にも「五町まち(吉原のこと)は、みんな近づきもやうに云いもて行き、じゅばんのえりて咽をしめながら」云々と書いてあり、極端にえりを合わせて着るのが、遊里あそびの若いものの流行風俗であった。

320 医者が見放すと天狗をよばる也

五 鳥

川端Ⅱ天狗とは自負・自慢の意だが、医者に対して坊主なら「医者が匙なげればさしを百なげる」「医が匙をなげると和尚鎌をなげ」で、祈祷師の意があるのではないか？

医者に見放されて、神頼みするの意と思うが、自信はない。

高須Ⅱ科学的な医術に見放されて、この上

は神仏(魔神まで)を信じるより手なしというところ。江戸時代ばかりではない、現代にもある風景である。

岡崎Ⅱ賛。だが「天狗」に特に何か意味はないか？

丸Ⅱ同。医者に見離されると、親類縁者に頼んで、千ごりをとってもらう人々は両国の垢離場につかって、大天狗小天狗を呼ばわって、病気の平癒を祈った。

岡田Ⅱ前説の通り。「川柳大山みやげ」を見られよ、例句多し。

岡崎Ⅱ「天狗をよばる」が「千垢離」とは、気づかず、うっかりであった。315同様恐れ入りました。

321 あいみんのふじゆでやと二人りに成

一 甫

川端Ⅱ「あいみんのふじゆ」は「哀愍納受」で、慇懃を垂れて祈りを容れ給え、と祈願すること。句意は、難産が祈願でようやく身二つになったという意と思う。

高須Ⅱ恋仲の二人が、やっと結ばれた、とも取れるが、「哀愍納受」が、非常に切実なので、やはり出産(それも初産)の句であらう。

清Ⅱ謡曲「道成寺」に、「一大三千大千世界の、恒沙の竜王哀愍納受、哀愍りきんの砌なれば——」とあるが、この文句取りか、或は「哀愍納受」は神仏に祈る時の常用語であつたらしいから、この謡曲とは関係なくつくられた柳句か？ いずれにしろ難産の句。

藤井Ⅱ初産の時の気持ではなからうか、妊娠前からの切ない祈願とりたい。

丸Ⅱ確稿賛。それも難産で、身よりの者に千垢離を頼んだ。人々は垢離場で「哀愍納受、大天狗小天狗……」ときかんに祈願する。そのかいあって目出たく出産、身二つになる。

生れたと橋の上からよばるなり

(タル一八)

岡田Ⅱ丸先生の説、御明解。

●川傍柳初篇研究●訂正

四五五号

11頁下段5行目「抱き上るが」面白く

なくなる「ハ抱き上る」が、面白

くなくなる

13頁二段18行目「の両句を見つけた」

ハの両句が見つ

た

お気軽るに

ご用命を

福 呉水店

高橋 操子

岸和田市野田町一七五

TEL岸貝局②六六三二



向つて左から正夫・青竜刀・月南・澄明・夢詩郎の諸氏

日本晴れの富士 に集うて

——大陸引揚川柳家同窓会記——

東野 大八

四月六日富士山麓須走、富岳荘で、大陸川柳家同窓会が開かれた。

参加者五十余名で、北は青森から、南は熊本までの文字通りの全国大会であった。

ところでこれまでの私は、富士山の山容を限なく仰ぎみたことはただの一度もなかったのである。いつもてっぺんに雲を乗っけて、勿体ぶっているのかはにcanでいるのか、それともお手前などに、とコバカにしているのか、とんと相手にしてはくれなかった。

ところがこの日の富士は、カラリ完全ストリップで、平らなそのてっぺんから、膝下の蹴出しまで、明けつぽろげの超サービスと

おいでなすった。しかもそれは一夜明けた七日の日まで、雲一つない紺べきの日本晴れで、八方限なき「全館開場」でありました。

もっともその富士の膝上あたりが集会所なので、奴さんも観念のホゾを噛んだのかも知れない。でこぼこ富士、私は御殿場線車窓から、その富士の裏側が背中かしらないが、ごく人間的なこの富岳の人間味を満喫しつつ山に上ったのである。

会場の富岳荘は、自衛隊の富士学校お抱えの宿泊寮である。このマスターのしよしやな老紳士中野柳揚さんの、献身的超サービスで、参会者一同ここから感銘したことである。

が、このころから続々とあの顔、この顔がぞくぞくと詰めかけてくる。富士の裾野は二十余年ぶりの集いで、イオリモッコの曾我兄弟どころの騒ぎではない。あちらで手を握り涙ぐむての再会と思えば、こちらでは相擁して声も出ない感激場面がある。

私とても同じ、そのかみ「若旦那」と仇名した安武仙涙さんの真白の頭をみたときには思わず涙がほとばしった。私が片腕を失う寸前まで戦友だった山崎小鮎、新京の土建協会の和室で色紙を頂いたとき以来の大島澄明さん、撫順の句会以来の出口夢詩朗さん、同じくその席での電々局長さんで押し出し充分だった長谷川里遊さんの枯淡な顔。そして人一倍感激家の渡辺雨明さん、そして、そしてである。

また奉天以来三十余年ぶりという人には小林魯牛さんがいられた。参議院に立候補して落ちましたが、またやりますというお人だが、胸いっぱい眼頭を赤くして私の手を握る、痛いはど力の入ったその大きな手。

この人は幾葉かの黄色い写真をとり出された。奉撫川柳大会や満洲番傘全満大会など、それに珍らしいのは、戦時中に出た番傘の手ぬぐいで

——初陣のカブトも赤し二十一の水府さんの手のものがある。色あせてくしゃくしゃになるまで、よ

うもようもというと魯牛さん「久良伎先生の画句帖を失ったのか痛痕事でしたよ、何さま宋美齡の漫画に「めんどりが暁つて滅ぶ国」とあるんですからな、こりやますい」

とご自身戦犯追及で遺骨棚の下に隠れた話が出る。志田忠六さんが首に何百万円の懸賞金をつけられ苦力姿で逃げまわった当日の回顧談とこれは好一対だ。

写真といえは、仙涙さんの心友福井天弓さんも、大陸の川柳記念写真を虎の子のように持参されていて、拝見すると私は思わず嘆声を放った。岩崎柳路、松代ご夫妻が撫順の同人たちにとり囲れての記念撮影だ。蝶ネクタイに口ひげ、松代さんは耳隠しにあでやかな和服写真の裏には、昭和九年三月二十日撫順日ノ出館とある。

また、同じころの写真に麻生路郎、江戸みつる歓迎会というのや、昭和七年四月十二日には庄万よし歓迎会、福合楼にてという珍品まである。

路郎先生は今とちがって大変みずみずしく、黒髪もふさふさとして青年教授の風格がある。この写真を中心に柳路さんの思い出や、路郎先生のエピソードがつぎつぎとび出す。一寸した川雑の夕を展開した。岩崎柳路さんが生きていてこの会合に出られていたら……と思うと、もうこちらは涙。彼の蒙難路の悪友山崎小鮎がここ

に来ていたものに……。

さて、いよいよ大会も最高潮、一同テーブルを並べ合つてところせましと座を占め、柳楊さんご夫妻の心意気こもる山海の珍味を前にする。一皿五百円（さもしいぞと誰かがたしなめる）はするマスの姿焼きに、ギョーザをまじえたスタミナ十二分の準大陸食である。司会が高須三味さん、私と同じ隻手のお姿が痛々しい。だが、相も変らず若々しい容気充分な押し出しと声量で、ソツのない進行である。

正面には月南先生を中心に、右に濤明先生、左に青竜刀大先輩、この三つの顔を眺めていると長城の雲がみえ、柳葉が飛び胡弓がきこえ、黄海の波濤がとどろく。大井正夫さんもうれしうてうれしうて、という顔で勸進元のジョークやシャレをとばして立ったり坐ったりだ。

まず正面の大陸最長老各位に対して一同カンバイ、酒とビール林立して彼我の賦酬たけなわの中を自己紹介である。一人一分でも二時間もかかるのだから大変である。

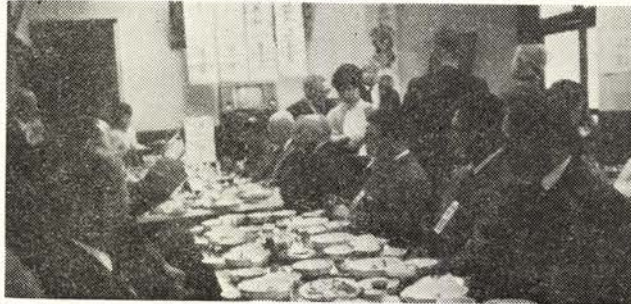
旅大教授だった松村三柳子さんが、最近の大連学会の消息をつけ出し「青泥」九十九号の終刊の思ひ出に五十銭の同人費が存外高かつた話。

大陸生活を終わって業苦にみちた終戦の死生観によって、禪宗に帰依し家内と別居、すでに唯然を法名にきめたと語る奥本唯然さん。

青竜刀が麗声という柳号をつけてくれたが、字が難しすぎて今だに迷惑しているという吉田麗声ひょうひょう居士。

「引揚げも没法子にして今宵あり」と一句詠じて、まだまだこういう会があれば出たい、十五年の禁酒を今日こそ晴れて破ることが

（懇親会会場の一部）



できて本懐と笑わせる長谷川里遊さん

盟友和田黙然人が今日ここに現われたならどんな顔をして喜ぶか、不慮の最後を遂げた彼の遺書を私は今もって懐中に入っている、とギョッとさせるような一席をぶった高木夢二郎老。

小林若八、安井八翠坊、蛭子省二、和田黙然人、井口香湖こうした故人をこの席にないことは懐かに寂しいことであるか、と述懐する大島濤明さん。

生きる喜び、晩年にこの喜びを今日ここにのみしめる幸せな私、とほつとつに語る高橋月南さん。

川柳らしい面目發揮の自己紹介に即席ドドイッが発わり、博多ニワカが登場して、会場のムードは最高潮いうことなしである。

五十一歳の私が、一番若いと考えてこきげんの自分の下に、奥原兩人さんが介在していたのを知って少々がっくり、向こうの方では、米代を始末してでも大会には行きなさい、といってくれた。一緒にな

ってこの方こういうモノわりのいい女房であったのか、と再んしきしたというおノロケの音がきこえたかと思うと、奉天でレインコートを質において遊びに行ったが女にフラれて、それから大陸もあの方の柳界にくわしい点をヒレキするエッチな御仁。わやわやがや、どの顔も、どの顔も溢れるような喜色と郷愁と親愛と友情とが溢れんばかりで、そこそこに泣上戸ともみえぬ人たちの姿さえみえる。

この和気満堂にあふれた姿に私は何度か熱いものがこみあげそして鼻先に冷たい涙さえ覚え

た。こうして一段落つくとき兼題投稿である。満洲が華北が南支が、朝

鮮が、独得のあちら語をふんだんにまじえてどの句にも活々と飛び交っている。こころ笑、爆笑、賛嘆、共感、こうした大陸調句会そのものに、酒とは別にこう然と酔いしれている顔、顔、顔。

こうした最中に、正夫さんと私は記者団と会見する。

「上は大会社の社長から下はしがない渡世の日雇いまで、みんな一つになつてのこの会です。ごらんさいこの中には大学教授も、懸賞金つきのA級戦犯、さては参議院の立候補者に、馬賊の顧問までいるんです。富士の裾野に日本中の元大陸人が、すべてを忘れてここに集り語り明そうとしているんですよ」

口早にこう語る私が、私自身コロンしてることが、われないが手にとるようであった。

会が終わると私は仙涙、天弓、独歩、炭吉、蝶古のみなさんの部屋に御厄介になる。よせ書、色紙、短冊の殺到である。こんなことは私にとつてはかつて経験したことのない大仕事である。このため、われないがいろいろだと思つてかいた色紙に「そりやあ大八さんわしの句じゃが……」とすぐ横にいる天弓さんにきめつけられ、とんだ大失態。それがまた面白い、とその人はニコ／＼、取り消しはせぬじまい。

朝五時、全員起床、頭の上の富士の日ノ出を眺めようとのプランだ。真紅の太陽は、東天の地平線を赤々と染めて上る。まったく大陸

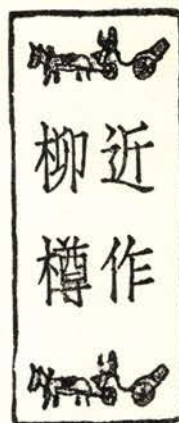
の日ノ出そのままであった。今日はみなさん、太陽はそういつた。

私と撫順組は一段高い丘に上つた。その私たちヘカメラ抱えた里嘉矩さんがついてくる。あとでこの人と二人、その丘を下りながらの語によると、この無口な神戸の柳人は終戦の八月二十日、戦友二人とシベリア行きの前夜脱走、ハラルからハルビンまで五十三日もかかって歩き通した大陸経験談をきいた。

「人間の条件の棍土等兵より一枚上ですな、その貴重な体験をおかきなさいよ」

と私はすすめながら、私自身も索然たる憶いで、胡砂荒が大陸の果てしない土の冷たさを肌にうかべた。枯葉の底に眠り、上衣一枚をひつかぶつて土砂降りの中ひたひたに寝た。会場にいる五十余名の柳人は、一人残らずそうした話に劣らぬ死と生のギリギリの瞬間に幾度かさらされ、そして生き抜いてきているのだ。この人たちと一つに結ぶ川柳——これは一体何ものなのだ。と私は考えつつけながら富士の火山灰の荒々しい土を踏んで、赤い地平線の真向かいに降りていった。

大陸川柳人よ、雑草の如く踏まれ、雑草の如くこれからも生きる、そのためにまた機会あらばまた会いましょうよ、私はそう語り話しかけながら、記念撮影のときを待った。富士は今日も雲一つたにない。



麻生路郎選

川村好郎選

貧しさを言わぬ家風の花を生け 倉敷市 水粉 千翁

おだやかな意見へすがりたい気持

父ちゃんを陥落させるこつで酌ぎ

ウインクは真直ぐ戻るのを信じ

金儲けしたばかりに惜しい人

拌みたい気持旅の席が空き

慾が無さ過ぎますのよと妻自慢

浪人をさせてなるかと親がもめ

味噌をする祖母としみじみ国訛り 羽曳野市 谷 一征

鍵かけず野良に出ていくのも故郷

精一杯歩いた亀になれと父

綿入れのじんべは母の暖かさ

堅実で通す社長の菜葉服

掛軸が二DKに落ちつかず

入院費無理した金と云わず呉れ

愛だけで食えず二人が戻って来

恋人の出来た悩みを聞かされる

寿司とジュース彼女はまだ若い

フレンドとしては好き^{よが}娘の意見言いたいこと胸に寝返り打った^だ贅沢のかぎりは数珠にまで翡翠^{ひすい}

恩給のつく職業の隅にいる

故里の母の匂いよ春の風

浮気つい許す気になり春の風

寝返りを打って偽りごとを悔い 見島市 伊丹柳瓢子

有難味妻が寝込んでからわかり

夕焼の向うに明日あり家路急ぐ

見舞客隣のベットにばかり来る

退屈なベットに積んだ月おくれ

噂など平気な顔でいる憎さ

明日という期限へ貸してもう二年

投げキッスせられ男の方が照れ

職業に貴賤は無いが執達吏 倉敷市 水谷 谷水

銭湯倒産隣りは笑いごとで済み

千年の不作ですわと敷かれとり

大坂市 今井 章子

現代柳人録



(一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号

(四) 現住所 (五) 生年月日 (六)

出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九)

自信の句一句 (一〇) 川柳以外の

趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二)

川柳に手を染めた年月

313 築山快夢起

(一) 築山清之助 (二) 快夢起

(三) (四) ハワイ州ホノル

ル市アカプブレース三五九三(五)

明治二十三年一月九日(六) 東京

都(七) 無職(八) 九八三九五二

(九) 古稀過ぎて消炭ほどの色気

あり(一〇) 読書・カメラ・短歌

(一一) 有(一二) 昭和十六年一

314 関根木九

(一) 関根太郎 (二) 木九

(三) (四) 東京都葛飾区亀有町二

の一〇二九(五) 明治三十五年二

月三日(六) 東京都中央区八重洲

(七) 折箱製造業(八) 〇三〇九

六一(九) 絵馬焼いて堂守ひとり

風の中(一〇) 観劇(一一) 有

(一二) 昭和六年

電話四三三四番



お招きにあづかりまして酔いつ	同	特価品特大ばかり残って居	愛媛県 嶮本 満子
地図掛け二泊三日の子を案じ	同	喜びは一人占め悲しみは分けた	同
セールスをはじめた妻のめかし	同	寡婦となり強さと艶めかしさが出	同
金貸してやれば仲人頼まれた	宿毛市 渡辺伊津志	鍵っ子は哀れ視線を避ける癖	加賀市 木村 一路
嫂の目が邪魔になる里帰り	同	棚の位置変えて三DKに住み	同
安らぎは子の寝息から寝顔から	同	殊持って老嬢魂までも冷え	同
新嫁の活花の影床に映え	同	ライバルの意地でケチをつけた	石川県 大山 雅城
ハイハイと二つ返事のいやな顔	玉野市 小谷 仙山	無心するときだけ母を見舞に来	同
塵一つないのが隠居嫌われる	同	一卷の終り一体何が残ってる	同
踊りまで教え娘に熨斗をつけ	同	愛情の交差点に嘘の衝突	大阪市 白井 孝子
雑草の花にも蝶は気を引かれ	同	儲った日の作業服さつと脱ぎ	同
春を待つこんな小さな虫さえも	鳥取市 近藤 秋星	失保の方が高いと入社せず	同
うちの人のいつもの癖と意に留	同	見舞に来た妻聖書のよを云い	大阪市 森本 良夫
布団にも思い切り春の陽を吸わせ	同	御無沙汰をわびての方が見舞客	同
傷心のはずがグラグラよく笑い	同	病人の気まゝを妻はもう疲れ	同
サーピス週間満員通過バス値上げ	大阪市 中川 滋雀	同窓会母校の坂を駆け登り	尼崎市 岡本 昭三
妻のヒス家中しばらく無抵抗	同	上司の目やっぱり気になる酒の席	同
ここの話の話を近所知っており	同	旅土産別居の父母へ妻届け	同
新築に古いたんすが邪魔にされ	八戸市 川村 映輝	酔ったとこだけが取柄の黒田節	大阪市 坂井 秀夫
利発ではないが元気な子が五人	同	金持ちに金の無いのが騙されて	同
飲む程に理屈はく座が白け	同	無造作に貸して女房につかれる	同



タケダ薬品

疲れ 神経痛 肩こり 心臓病 疲れ目

アリナミンのもう!

夏峯(四)岡山市野田二八八(五)
明治四十四年四月二十四日(六)
岡山市野田二八八(七)日本電信
電話公社社員(八)岡山(22)九一
六〇(九)鳥籠の広さを知った羽
根で飛び(一〇)墨絵・沖釣・鮎
釣・彫刻・囲碁・盆栽作り(一一)
有(一二)昭和二十五年三月

(321) 光 好 陽 子

(一) 光好綾子(二) 陽子(三)
——(四) 岡山市岡山九九の一〇
(五) 大正四年八月二十三日(六)
岡山県(七) 岡山電報局社員(八)
——(九) 社会事業につくした女
史の白い髪(一〇) 編物・手芸
(一一) 有(一二) 昭和三十年四
月



時価とあるメニューが敬遠されてお

受 豊 県

川又 庸児

金貸せぬ方も断りにくそうに

同

女房に押しまくられて無事にすみ

大 阪 市

山地 判志

慰めの言葉に涙出てくれず

同

もう東洋の魔女でなし角かくし

茨 木 市

高木繁太郎

手拭を肩に庶民の夜となる

玉 島 市

井上 旭峯

好転の兆し主治医にある自信

同

小学生の方が席を空けてくれ

大 阪 市

谷本 泰山

金あって坐らされている床柱

同

彼女たゞ自家用に乗せてほしい

出 雲 市

竹内 李明

窓口へ女の御世辞まだつゞき

岡 山 県

永宗 宗義

異動の噂根掘り葉掘り聞き

同

夜更けても親子の基石が未だ続き

萩 市

和泉 松風

招待麻雀苦勞したのに負けられず

同

風邪のおかげで春眠味わえり

兵 庫 県

常岡 孝風

春を呼ばん丘に駆け上り

カ ー ホ ル ニ ャ

齊藤 流路

日本のレンズを褒めて撮ってくれ

同

春の譜を奏でる磯を去りがたく

島 根 県

青山 釣童

ミュージックとスポウニテロ負

同

定退へまだ一本も欠けない歯

大 阪 市

福富 隆子

失業の丹前気楽そうに見え

大 阪 市

藤富 淀月

粋な洒落わからん顔の舞妓さん

同

二人切りの部屋へ飛び込み身

大 阪 市

大池 芳

制服はいゝなと卒業して思い

大 阪 市

阪川 有子

家計簿へ一つずつ出す市場籠

同

うっかりとおだてて金を出し

大 阪 市

上林 清江

検問所に呼び止められた顔になり

大 阪 市

大崎 筆染

ボロかくすペンキが匂う新店舗

同

新しい角帽パバもかぶってみ

金 沢 市

根上 杏花

外遊が済めば任期もやがて切れ

松 原 市

守屋 万竿

家政科を出たが缶詰ばかり買い

同

税務署へ次は笑顔の妻をやり

福 岡 県

小田 無限

植林がすんだ祝の膳に就き

兵 庫 県

斎藤たけお

先輩を頼る夜汽車の一人旅

宮 崎 市

野口卯之助

柳 志 寸 言

本 多 柳 志

◇川柳も俳句も共に、詩としての本質に於て同じである。俳句作家も川柳を、川柳作家も俳句を共に理解し得べき筈であり、原則的には専門という事はないのではなからうか。

◇お寺の鐘は極楽へ行け行け（ゴインゴイン）と鳴っている。教会のかねの音は天国へ来れ来れ（カムカム）と、鳴っている様に聞こえる両者の性格を暗示している様で面白い。

◇人間は習性の動物である。住みなれた古巣をけて立つた人も、いつの間にか又元の古巣が恋しくなるものである。所謂革新派と自称する一部の川柳作家も、この例外ではない筈だ。

◇読みたい本をいくつも、つんどく事も又たのしいものである。いつでも読みたい時に読める安心感である。女の人が着せぬきものをいくつもたンスにしまっておく事も又たのしいものらしい。いつでも着たい時に着られる安心感であらうか。

◇川柳の様な短い文章が、複雑な内容を表現出来るのは、てにをはのもつ特色と豊富な連想性にあるのであって、てにをはこそ世界に誇る日本語の特長である。



川柳太平記 (五)

富士野鞍馬

北条高時

——九代執權——

文永、弘安二役の後、時宗は死に、幕府は弱力になってしまった。勝ったといっても、元軍を追っ払っただけで、得たものは一つもないのに、将兵たちは恩賞を要求し、不満は大きくなり、統制は乱れた。時宗の子貞時が次の執權になったが、凡庸人物であった。

正和五年(一一三六)貞時の子高時が、十三才で九代執權となったが、暗愚で遊樂に耽り、遂に北条氏は九代で亡びたのである。

九代まで伴頭持で相統し (拾五戦)

田樂舞

高時が、田樂舞を好んだことは有名で、後世唄にうたわれ、劇にもなっている。

鎌倉の田樂むかし羽根がはへ (傍初43)

東魚でせなどと天狗をはやす也

天狗ふりつけて入道をどるなり (筈四七)

高時は若くして入道し、天狗の舞をよく舞った。 (二五二六)

「みなここに、みつの鱗と名も高時が、浮かれ天狗の酒盛に、祇園豆腐の田樂舞は、さすが日本にたぐひなき」

と小唄にもうたわれている。

高時の御所田樂でやぶれ御簾 (八八三五)

九代目は田樂を好きみそをつけ (三六二六)

みそで始まり田樂では乱れ (一〇四四〇)

食べ物の田樂にかけても作られて (三三三三)

いる。みそは時頼をいう。

鎌倉の大

また高時は、闘犬を好み、そのため犬を珍重する風習ができ、

「肉に飽き錦を着たる大鎌倉中に充満して四五千疋に及べり」という状態であった。

九代目はそこいら中が大だらけ (筈二追4)

犬骨折って高時は滅亡し (五二一四)

入道はみみのたれたがきつい好き (明六満2)

初かつを高時犬にくらわせる (二二一八)

一トさかり鎌倉中が糞だらけ (筈二六)

大坂と北条犬にしまかされ (筈四二〇)

九代目の末にまぢんの値が下り (拾五戦)

俗諺に「犬骨折って鷹の餌になる」という。「まぢん」は大にかまれた時の傷薬である。大阪の犬は大野道犬をいったのである。

東魚

高時を東魚として川柳にも作られている。

相模入道の俳名東魚なり (二〇九)

沙がひて東魚おさへる鍋の蓋 (三八一七)

九代目はしまりがなくておつづぶれ (三三三三)

未来記で見れば高時さかななり (一九一八)

聖徳太子の「未来記」に「人王九十五代に当って天下一度乱れて安からず、この時東魚来て四海を呑む」とあるのを、楠正成が、高時をこ

の東魚に当ると考察した(太平記)というのである。「鍋の蓋」とは、新田義貞のことで、その紋が丸に二つ鍋蓋のようであるので洒落たのである。

鎌倉幕府滅びる

元弘三年(一一三三)五月七日、幕府の関西の中心、六波羅府は、足利高氏に占領され、五月二十二日には、新田義貞が鎌倉を攻め落し、高時はじめ一門の二百八十三人が自殺し、ここに百五十年の鎌倉幕府は滅びた。時に高時三十一才であった。

義貞は、この攻撃に際し、稻村が崎で、海の龍神に向かい、潮の引く事を祈願して、黄金作りの太刀を海に投じたので潮が引いた。と伝えられ、海までがいふなりになる運のつき (拾五戦)

義貞の勢はあさりをふみつづし (初一〇)

鎌倉の汐干鱗の仕舞なり (一一四二)

龍のこけ義貞むくおつことし (三九二)

焼飯を義貞三つふみつづし (三八一八)

田樂でのもんでる所へ鍋の蓋 (九一七)

と川柳に詠まれ、焼飯三ツは北条の家紋三鱗をいう。そして九代で亡びた北条を、川柳はまた多く

詠んでいる。

九代目は破れ障子にしてしま (九九三八)

伊豆ぶしも八代迄はだしがきき (初二四)

北条の時分天下は坊主持 (七八三)

九代続きし鎌倉の坊主持 (一四二三一)

九代目に坊主が出たでばれたなり (八二)

障子は時頼の母を諷し、また鯉節にたとえ、時政、時頼、高時などが入道したこといい、坊主を博奕にもたとえている。

鯉うり北条九代出入けり (武一〇二二)

九代目のうろこ龍宮でも怖み (四九三)

九代目はくらやみとなる星月夜 (九一二二)

九代目に東鑑もくもる也 (八四二八)

鎌倉は九ツ限りで時は止み (一六二九)

などとも詠まれている。

時行

高時の子時行は、建武二年(一一三五)、幕府の再興を計り、足利直義を追って、鎌倉を一時占領したが、尊氏の軍に敗れ、後、吉野朝廷に帰順したが、正平八年(一一三三)足利氏に殺された。



入門

研究題「あくび」

清水 白 柳

御意見をガムと欠伸で聞いている。八文銭

意見は欠伸で聞くという着想が、たくさんあった中で、ガムを噛みながら聞いているという所によさを感じたのである。

満ち足りて涙まで出し大あくび

慈郎

早起き会あくびも混る深呼吸

同

涙まで出る程の大あくびを見つければ成功であった。慾を言えば満ち足りた事柄を句語に詠みこむことが出来ることも佳句になる筈である。早起き会の句も面白かった。

あくびしてすっきりとした思いをし 泰山

作者が素直にその感じを現わしているの、この句が生きているのである。『赤子でもあくびするなりたくつか』という句もある

が退屈かという感じかたは浅いと思つた。

金のない欠伸は手持ち無沙汰なり 秀夫

欠伸へも惚れた弱味は気をつかい 同

二句共取立てて言う程のものを持っていないそれは平面的な句の表現になっているからであると思う。留守番の句は古句にあるので頂かなかった。

長談義あくび噛みしめ涙出る 洛辭

同

おなじみが去んで姑の生あくびを古くしている。別の句語を考える修練をしてほしいと思う。生あくびは情景がよく描き出されている『隣席の』『独り者』の句は同想が多いので採らなかった。

月曜の出動電車につれあくび

弘村

明日までの用まだすんでないあくび 同

つれあくびという語は少し無理のように感じたつれあくびにしないくても、出勤という語で電車はいらないと思うから句そのものをも一度考え直す必要があると思つた。『明日迄の』は実感があるの佳いと思う。『あくびしてカバはむし歯を見つければ』は作者も言つて居るように想像だけでは共感を得られないようである。

春眠の不満あくびで気合入れ 辰始

作意がも一つハッキリしないようである。『不満』と気合入れがチグハグな表現になっているからではないだろうか。『初日の出グレンはあくびした格好』は作者の見たまの句であらう。

早よ起きただけにあくびも念が入り 弘朗

女房ともらいあくびを笑い合ひ 同

さすがにうまい句である。ソツのない句になっているだけに、もっと突込んだ句がほしいと思うのは私だけでないだろうと思う。

臨終へ下座あくびをかみころし 周甫

あくびして早く帰れとうながされ 同

作者は今『私本太平記』を読んでいるので、私の住所が南河内だからなつかしいと添書があった。私の所は南河内でも北の端だから正成公の遺跡とは遠いが、先日富柳会の吟行で行った天野山金剛寺は由緒の地である。

総会の廊下へ逃げて出たあくび 章雅

遅参して来たのがあくび連発し 同

つかむところをつかんだ立派な句である。課題にふり廻されてないのも、作者の年季がものを言つたのであらう。

かたづかぬ仕事の前で又あくび みさ子

あくび位気らしくにさしてと娘は二十才 同

不景気な閉店まぎれに出るあくび 同

今回の句はどれもよかった。作者は仲々上達しないので焦りを感じていると言つて居られるが、自分自分なりの句を詠んで居ればよいので、落つて作句に精進してほしいと思う。

あくび出る頃残業のうどん来る 雄声

あくびの続き歌を口ずさみ 同

同じ郷里出身の川柳家で私を先輩だと言つて、この講座に出句されるが、立派な作家である。今後共鞭撻して下さいをお願いしたい。生返事あくびに変わるたよりなさ

隆史

夜警する友へ欠伸をおいて去に 同

川柳は生まれるものでなければならぬというのが私の主張だ、がこの作者の句はどれも生まれたい句である。それまたのしく生まれたのであらうか、のびのびとしているのがうれしいのである。

あくびまで家風家風とうるさ過ぎ 杏花

この作者に郷里のこまつ川柳会でお目にかかった。熱心な作家で心強いものを感じさせられたこの句には因襲的な旧家に対するレヂスタンスが描かれている。

堂堂とあくびし合つて倦怠期 酔夢

大あくびしても妻の座ゆるぎなし 同

ズバリと思ひ切つて句にまともに居られるのが共感を呼ぶ原因であると思う。『生あくび定量とみた妻つけず』は何故か素直に採れないのは男のひがみだけではないと思うのであらうか。

マージャンでいかれたあくびとも言えず 愛鳩

借りに来た弱身あくびをかみころし 同

一足とびに新しい視方とか進んだ表現は出来るものではない。しっかりと地についた態度で落着いてゆっくり研究してゆきたいと思う。

金 泥 集

課 題「花 吹 雪」

麻 生 葭 乃 選

花吹雪矢尻で書いた歌へ散り 阿 茶
 花吹雪浴びてホテルへもどって来 同
 花吹雪 浅黄ざくらは今見頃 同
 サイクリング名もない峠の花吹雪 同
 ぬれ縁へ又一しきり花吹雪 同
 お地蔵の手に溜った花吹雪 同
 花ふきお城まつりは昨日から 同
 尼寺はひっそり閑と花吹雪 同
 花吹雪塚の青さへ落ちてゆき 同
 リウマチがまだ治らない花吹雪 同
 花吹雪病んでいる眼へ窓を開め 同
 花便り今日来てよかった花吹雪 同
 いさぎよく若葉にゆずった花吹雪 同
 花吹雪舞台いっぱい切狂言 同
 花吹雪その一ひらを猪口で受け 同
 そのまを着物に染めたい花吹雪 同
 花吹雪闘病の目にうれいあり 同
 爛漫も今日が境いの花吹雪 同
 うちあけるムード到来花吹雪 同
 花吹雪若しやと思う待ち呆け 同
 花吹雪隣の三味にうかれ出し 同
 ひとり来て孤独にさせた花吹雪 同
 宣伝のビラが空から花吹雪 同
 花吹雪グラスにも受け花の宴 同
 満開へ忍者遊びの花吹雪 同
 お、ワンダフル父母の国で花吹雪 同
 スキートを切った花散るみとせ前 同
 花吹雪孤独の肩へ容赦なく 同
 花吹雪ガイドはしばし立ったまま 同
 前だれで子供が受ける花吹雪 同
 花吹雪おちよくの中へもひらひら 同
 花吹雪下で踊るは法界屋 同
 片便り待つ気も知らず花吹雪 同
 不合格の我につれなき花吹雪 同
 日曜を待ってくれずに花吹雪 同
 花吹雪待ってましたとカメヲ向け 同
 同 夏 同 甫 同 女 同 子 同 子 同 夢 同 子 同 栄

次回題「身の上」 〆切五月末日

さす祖母あくびの泪とは知らず 八 郎
 句会では無記名なので気が柔な
 のか思い切った句を出して居られ
 るが、今回の句はどれも平凡だっ
 た。人にわからなくてもいいと言
 う位いの気持で突き進んでほし
 い。

生活のテンポ車であくびする

譲 士

図太さが大きなあくびして出か
 け 同

あくびする緊張ひとつづつはぐ
 るまであくびするという句は
 いいところを詠まれている。図太
 さの句もはっきりとつかんだ作者
 の手腕はしっかりしたものであっ
 てたのもしい作家である。

有効にあくびが出来る年になり
 同 句 楽 坊

堂守のあくびがひびく格天井
 同

鰐口があくびをし出す花が咲き
 同

環境から自然に生まれる句とい
 うものは、だれにでも判るもので
 ある。そこに作者の生活がにじみ
 出ている、読んでたのしい感じを
 抱かすので共感を得られるのだと
 言える。

見た途端うつるあくびに首かし
 げ 同 繁 太 郎

エチケツトなどとあくびにとり
 同 不 満

見た途端の句は作者の性格をそ
 のまま見せられたように感じた。
 エチケツトの句は面白いと思う。
 それは結びの語句にあるといえ
 る。

妻の留守犬もあくびをする平和

滋 雀

散髪を待った鏡へあくびする
 同

最近非常にいい句を見せられる
 ようになった作者に注目している
 のである。この二句もそれぞれ面
 白と思うのだが、ぬきでたもの
 のないのが惜しい。『両手虚空
 を』の句は古句にあるので採らな
 かった。

大あくび顔半分が口になり
 同 松 風

寝床での固い本ではあくびが出
 同

大あくびの句は面白いのだが、
 これ以上面白がるとくすぐりにな
 るので気をつけてほしい。寝床で
 の句は作者の実感なのであろう。
 吾々も同じことであって、そこに
 共感があるのである。

新婚のあくびとらえて一とき
 同 美 房

この句も作者の実感なのだが、
 こうした句は他にもあって類想
 倒れということになる。ただこの
 句の下五文字の一としきりという
 語句によって救われていると言え
 るのであろう。

昼夜通し初日の舞台へあくびす
 同

初 市
 幸せな事よ遠慮のないあくび
 同

包紙の皺をのばして母あくび
 同

お茶席にいるから欠伸手で受け
 同

いつも佳句を見せて頂く閑秀作
 家である。どの句にも作者の息吹
 きを感じるのだが、殊にお茶席の
 句にはそこはかとなくユーモアが
 溢れていていい句である。包紙の
 句などは幸福な家庭の雰囲気によ
 く出されていると思う。

訓示聴くあくびがこぶしてたた
 かれる 宗 義

あくびにもシナあり前は長火鉢
 同



コクヨ
 便 箋





迷亭終焉記

高須 啞三 味

「迷亭死す」——これは、三月十三日朝、ボクが十数通打った電報の本文である。

その前夜(十二日夜)塚越家から「主人の様子がおかしいから、ちょっと来てくれませんか」と、電話があったのは十時ごろであった。ボクは、こゝ数日、迷亭の健康が非常に衰えていることに気づいて、それとなく危ぶんでいた時であったから「よし、直ぐ行きましよう」と、即座に家内とセガレに支度をさせて、三人で根津へ駆けつけた。

ボクら三人が、塚越家へ到着したのは、十時四十分ごろであったが、家へ入るなり、セガレは「あ、間に合わなかったか」と、小声でつぶやいた。ボクは、彼の寝ている二階へ上がろうと、ツカツカ階段口へ進むと、そこへ二階から下りて来たのは、往診靴を抱えた医者であったそして、医者はボクらを近親者と思ってであらう「どうも……」と、イカンの意を表する言葉を、短く口早に述べて、ソコソコに帰って行った。それを見て、ボクは初めて、

てみた。

ボクは、迷亭の友情動員に応じて、七日午後から迷亭の自宅に、通いつめた。——彼の発行(経営)する「全国浴場新聞」編集のためである。そして、それは毎月約二日で出来る仕事で、迷亭の健康のため、八、九、十と四日続けて通って、四日目の十日にボクの独断で「もう、これでいいよ、これで三月号は発行できるから、後しばらくユツクリ休めよ」と、ウツラウツラしかけている迷亭に、大声で告げて、彼の「ありがとう、ありがとう、印刷所の方、うまくたのむよ」と言う、眼をつぶったまの感謝の声を後に、ボクは十日夜十一時すぎ芝の自宅へ帰ったのだ。

「間に合わなかった」と聞いた。「電話を聞いて、直ぐ来たのに……」そう言いながら、ボクは二階へ駆け上がった。迷亭は、いつごろからか、フランス・ベッドを買って、それを使っていたが、その自慢のベッドに寝ている彼の額は、ボクの手にもう冷たかった。

「そんなに急がなくても、よかたに、バカだな」ボクは、彼の額を撫でながら、そう言ったが、涙が止め度なく出て、それ以上は言えなかった。

後で、家内に「あなたが、迷亭さんに言った最後の言葉は、どういう意味だったの?」と聞かれて、ボクはその時の言葉を反芻してみた。

今回の句は余りよくなかったように思う。訓示の句も類想がたくさんあったが、こぶしでたたいたという動作をとらえたので採ったものもある。長火鉢の句は旧い感じがする。それは長火鉢そのものをあまり見かけなくなったせいかも知れない。

千 夏

お説教も孫のあくびで止めになり

同

あくびの子だんだんふえてか、

ますますふえてのどちらがよいだろうと迷って居られたらしいが、

ますますでは重くるしい感じになるのでいけない。次の句の孫のあくびでストップしと止めになりは

矢張り止めになりの方が情景がよく出ると思われるのでこの方を選

有 子

のみ込んだあくび捉えた美容院

そろそろと余所見をしいあくびが出

同

若い有能な作家である。自分に

川柳の素質がないのだろうかと思

って居られた時もあったが不朽洞

盃を受賞されて自信をとりもどされたようである。あせらずに自分の境地を見つめて進んでゆかれるよう折るものである。

万 竿

点つける器械欲しやと大あくび

不在

今回の句はどれも佳句であっ

ついあくび手持不沙汰で新社員

同

面白い程句の出来る時期はいつ来るのだろうか。そんな時期が待ち遠しいという作者である。面白い程句が出来るといふことにも色々あって、いくらでも作れるという時と、苦しみ苦しみ作句しているのだが、その句がみな相当立派な句であるというような時もあるのである。苦しんで作句するのが楽しいというのを御体験のことと思うが、どうかたのしく作句を続けて頂きたいと願うものである。

能率と別のあくびをとがめられ

隠し芸済むまであくび我慢する

真 砂

川柳に生き甲斐を感じて、ひたすらにそれに打込むことによって現在の環境をよりよいものにする努力は尊いと言わねばならない。作者はそれを実践されているのである。句の巧拙などどうでもいいと言つては言い過ぎだろう

か。御健闘を祈るものである。セールスマンの不覚あくびが出

てしまい

保 夫

招待席の手前あくびをかみ殺し

オールドミスのおくび課長も皆

同

不在

同

今回の句はどれも佳句であっ

十日ばかりジツクリ静養して、体力を元へ戻せよ」と言って、仕事のもとめにかゝっていたのだ。

原稿は、そうして曲がりなりにも、十日にまとまった。印刷所には、勘定の都合もあって、いつも先ず彼が行くのであるが、こんどはボクが行くことにして、十一日午前中に、ボクが工場に行き、原稿を職長に渡し、社長がちょっと健康を害しているの、ボクが持ってきた。従って、校正大組もボク一人でやらなければならぬから、二日ばかりになる（いつも一日で済ませるのだが）ことを許してはしい。ついでに、無理かも知れないが、十三日の土曜日にグラ校正をして、十五日の月曜日大組という手順にして貰えないか、と懇願した。

職長は、話しのわかる人だし、平生ボクらと親しくしているの、このボクの申し入れを「どうも、お湯さん（工場では、ボクらのことをそう呼んでいる）。じゃア、しょうがねえや、そうやりましょう」と、快く承知してくれた。ボクはホッとして、一荷物肩から下ろした袋持で、その足で岡田甫さんを訪ね、村田岡魚師を見舞って、夕方帰宅した。――工場は、新宿（牛込）山吹町にあるので、それから新宿戸塚町、豊島区の高田本町は足順もよし、出たついででもあったので、御身体が悪い御兩人を御見舞いかたがた、お

寄りしたのである。

すなわち、これでボクは十一日中迷亭に逢わず、十二日は午前中に、迷亭の事務所へ電話して、工場のことを伝え、どうせ明日（十三日）校正が出れば、仕事は出来ないうまでも、グラ刷りぐらい見せて、彼を安心させたいから、彼の宅へ行く。だから、ボクは今日も迷亭の所へは行かない、と伝えて、迷亭居へ通っていた間に滞った、自分の周辺の雑務を整理しにかゝった。

書斎のボクは、いつも午後六時まで仕事をして、六時以後はなるべくテレビを見たり、家の者たちと談笑して、すごすことにしているが、その日は少し雑務が溜まっていたので、テレビ半分・仕事半分、午後十時頃まだ机に向かっていた。そこへ、迷亭の事務所から、電話がかゝったのである。だから、ボクは別に支度をする必要はなかった。家内と次男にだけ支度をさせて、電話がかゝってから、十分ぐらいいで、家を出たのである。

従って、ボクは迷亭に「何故そんなに急いだのだ」と、言いたかった。もう一日待てば、あんな苦しい状態のなかでまとめた原稿が、新聞になる一歩前の「グラ刷り」で見られるのだ。たった一日、時間にして二十時間ばかり待てば、グラが見られ、もう二日待てば、立派に新聞の形になった「大組」

の「責了」（責任校了）といって、工場側に責任をもってもらう最終版）のヤツが見られたのだ。何で、その三日、いや一日でいい、その一日が待てなかったのだ、とボクは迷亭に言いたかったのだ。それが、涙に邪魔されて、シドロモドロになり、傍で聞いているからには言葉になったのである。人間というものは弱いものである、としみじみ感じた。

死ぬ日（十二日）の午後三時ごろ、土橋芳浪君と松井清志君、小谷源氏君の三人が、迷亭を訪ねている。川柳家曰倉寿夫君の家にオメダがあつて、同道することになつていたからである。ところが、迷亭は「それは、十二日だろう、今日は十日だよ」と、言っていたのである。で、三人が「今日が、その十二日だ」と、口を揃えて言ったので、彼はヤツと十二日だと承知したが「今日はヒゲも剃っていないし、身体具合もよくないので……」勘弁してくれと言ひ、曰倉家への祝吟と言われて財産の第一号は百貨店 迷亭と詠んで、三人に曰倉家へ行って貰った、ということの後で聞いた。とすると、その夜死ぬとは、自分では思つてもいなかった迷亭の、この世で、一番最後に作った句は、辞世ではないこの句ということになる。思えば、如何にも迷亭らしいと言えよう。 合掌

（四〇・四・八）

た。実力があつても出来ない時があるが、続けて頂くとこうしたい句が生まれてくるのでたのしいことである。どうかつづけていい句が生まれることを楽しみにしている。

お通夜で包むあくびも血のへだて 和 三郎

ライオンのあくびを檻で見るいのち 同

あくびして眠足りし朝の空を抱く 同

どの句も結びの語句に焦点がしぼられて通夜の句の血のへだてなどこれ以上の語句はないと思える程である。ライオンの句の「いのち」と次の句の「空を抱く」の結び方などこの作家でなければ見られないようである。てれくさいあくびパンフレットで叩き 静 水

御忠告添けなくもあくびが出 同

誠に熱心な作家で、国鉄に勤めて居られる関係から遠くの句会にもよく出席されている。川柳の色々な雑用も必要なことではあるが、作家としては句が一番大切であることを自覚されては居られると思うが案じているのである。心してはしいと思う。

もういけぬ小唄にあくびついで出る 与 志
ピアノの娘あくび出てからやつと止め 同



多説多作ということをよくおすめすることがあるが、多説といつても、読み流しではいけない。矢張りその読んだもののうちから何かを得ようとする心構えが必要なのである。多作ということも同じでただ作り放しで並べるだけでは佳いものが生まれぬ。この作者には手紙の端に書かれた句に本当の作者の心を見ることが出来る。『ベル鳴ってあくびの夢をやらねぬ』などはその例である。赤ん坊のあくびの句が沢山あつたが、春葉さんの名句『あくびくっしやみシャックリと赤子いそがしい』というのがあることを知って頂きたいと思う。

次回 研究 題「城」五句以内
〆切 五月三十日

宛先 大阪府南河内郡美原町
丹上四〇四 清水 白 柳



江戸川柳と紋章

阿達義雄

(三) 柳多留における天明寛政期の紋章吟

〔町人紋〕

天明寛政期は川柳点が衰退の徴候を呈した時代であり、その句風から見ると狂言的な句が多く現われた墮落の時代であって、風俗史的立場から考えても、寛政改革の前に当たっているから頹廃的な気分の横溢した時であった。

これらのことは当時の紋章吟を見ただけでも領かれることで、町人紋でも四つ目屋の句が圧倒的に多く、「柳多留」に三句採られ、「末摘花」にあっては十句も検出することが出来るに反し、「柳多留」に現われている他の町人紋の句は、三扇、沢潟の各々一句、紅葉の二句、三星の三句で、これらを合計しても七句に過ぎない。

紅葉の句は仙台高尾関係のもので
○萩は名物紅葉は土地に合はず

(二一・ス5)

○萩は仙台の名物であろうが、紅葉は仙台の土地に合わない。
○紅葉は沈み豆腐屋は浮かむなり

(一七・37)

○高尾(紅葉)は伊達侯の吊し斬りに逢って海に沈められたが、豆腐屋は伊達侯から伽羅の下駄を貰って栄えた。

右は仙台の萩や仙台侯の山谷通いの俗説を取り込んだだけの句で、何等の穿ちもなく散文化してしまったものである。

傾城と対照的に考えられるのは歌舞伎の女形であるが、これについては、岩井半四郎の三扇紋の句を見出すとはいえず、それも、半四郎と半紙との言葉の洒落、扇に因んだ沈折の語と三扇との縁語を狙った「三本折らせる」という様な単なる言語遊戯の句であって、

○三本折らせて半四郎を頼む

(二〇・10)

という風に天明元年義印万句合に「三本折

ラせて半四郎をたのむなり」とあった、その「なり」迄も削って徹底的に散文としている。

この様な縁語掛詞だけが取柄の句の頻出するのは天明川柳点の病弊であり、又特徴でもあった。

次に商舗の商標の句を見るに、本郷の薬種屋沢潟屋を詠んだらしい句があり、

○沢潟とてうせんせめは向ひあひ

(二三・34)

というのが見られ、句意が明瞭でないもので何とも評されないが、当然のことをそのまゝ詠んだ句の様に思われる。

前の紅葉吟に於いて、

紅葉は沈み豆腐は浮かむなり

萩は名物紅葉は土地に合はず

対句的な表現を以て、散文化の欠を補ったつもりらしい句を見たのであるが、この傾向の句は四つ目吟にも見える。

○中山は石四つ目屋は葉なり

(二〇・38)

○小夜の中山に夜泣石、四つ目屋は夜泣葉。
又、言葉の洒落を利用した四つ目吟としては、

○四つ目屋の近所ゆくよは面白し

(末四12)

○四つ目屋は両国の米沢町にあり、その向側の吉川町に、小松屋の幾世餅という名物売る店があった。

末番(破礼)句には、同じ言葉の洒落でもこの様に諧謔的に利用する例が多く、「幾世餅」の幾世を性的な言葉にかけて諧謔的に表現したものである。この頃の数的狂歌吟については別に特説した処であるが、四つ目吟にはこの種の手法を取った句もあり、四つ目は五つ目と三つ目の間であるので、

○五つ目と四つ目のあいだで下女泣かせ

(末三・9)

として、四つ目の語を憚ることによつて駄洒落を弄したものと言つてよからう。

その他の四つ目吟はみな暴露的に傾いたものである。

○能書きの通りじや四つ目安いもの

(二二・18)

○よいが上にもよいやうに四つ目なり

(末四・16)

○四つ目やをつけてどくくしくよがり

(末四・18)

○こうてきに喜びますと四つ目言ひ

(二一・ス4)

○四つ目屋の試みに下女されるなり

(末四・21)

○枕に残る葉とは四ツ目なり

(二二・15)

○馬鹿も重宝四ツ目屋を買ひにやり

(末四・11)

○四ツ目屋を小姓へつけるいぶかしさ

(末四・21)

○尤な事四ツ目屋へじやもつ面

(末三・3)

○へのこに勇を振るはせる思ひやうへ

(末三・4)

最後の句には文字面として、四ツ目は見えないうが、四ツ目屋忠兵衛の姓を省略して忠兵衛とだけしたものである。

三星は日本橋四日市の葉種屋で売られた毒葉であり疵葉でもあった。この三星葉の本舗が渡辺で、それによった葉名とも思われる。

○三ツ星へ見せるへのこの向ふきず

(一七・37)

○三ツ星の見世へのこの手負ひ来る

(末四・22)

○三ツ星屋番附で見るときの

(末三・8)

三星屋は芝居の番附を見ても、どの役者が例の病気で手負いになっているか、分る。

三星吟の右の句は卑猥な暴露に終わっているものが多く、狂句的な言語遊戯すら認められず、闘争的用語の「向ふ此」「手負」によって滑稽化されたとしても頗る平凡である。

要するに、天明寛政の町人紋の中の、四つ目吟や三星吟は、この時代の川柳点の墮落面を語り、その底辺を示していると言われよう。

然し、紋章吟という制約を去って、四つ

目吟を広く見た場合には、春画にも傑作がある様に、佳句のあることも認めなければならぬであらう。四つ目葉を四つ目と言わず余韻、含蓄を持たせた句もあるからである。

〔武家紋〕

天明期の句を収めている「柳多留」に於いて稍々目立つ武家紋の句は繫馬吟と梅針吟であって、繫馬の平将門は次の様に詠まれている。

○下総の内裏紋からして下卑

(二〇・10)

○じゃく馬に友が出来たで事になり

(二一・16)

○馬はねを秀卿が出てぶつこわし

(二一・17)

安永期の句とは格別な差を認め得ない。

次に明智桔梗、秀吉の馬標の千生瓢箪、真田六連銭の句が各々一句宛見られ、

○桔梗をば三日ほどにて染めて遣り

(一九・ス2)

○薩摩諸州へ瓢箪植えた沙汰

(二二・23)

○大阪落城の際秀頼が島津家を頼って

○銭を絶やさぬ工夫する安房守

(二二・33)

これらに於いても安永期の情性が見られ薩摩諸と瓢箪の紋語の中に、島津藩と秀頼とを譬喩的にしようとした材料が紋章吟として新顔だというだけである。

梅針は宝暦以来屢々詠まれているに拘らず、今迄「柳多留」には採られなかった。

宝暦万句会だけでも、加賀の梅針と限定しなければ、

天神へ参る右手は梅屋敷 (宝十・義)

○上野の方から切通しの坂を登って行く、加賀屋敷は右手になり、湯島

天神は左の方になる。

梅針のやうに座につく大江山

(宝十三・智3)

○譬喩として梅針が用いられている。

この前句題は「つれ立ちにけりく」右の様に二句発見される。

此処に紋章吟の採択について特に問題にしてみたいのは、川柳評万句合に於いては紋章吟の場合、当時、名譽とされた高番句に据えられる公算の多かったことである。高番句の中の高番句は巻頭吟であって、この場合取次いだ組連も之を誇とした。

(作者名は万句合には出さない) 今、万句合に載っている十萬石以上の大名紋の句の四〇句について、巻頭吟に採られている句は次の様である。

・明和三年信印の巻頭吟(取次) 初瀬連

・神鳴の子孫で紋も光るなり

・安永元年梅印の巻頭吟 初瀬連

・母方の紋家からつけはじめ

・安永二年龜印の巻頭吟 初瀬連

・梅から松へすじを引く能けいづ

・安永二年七月五日の巻頭吟 初瀬連

・萬を引きぬいて桜を植えるなり

・天明元年智印の巻頭吟 桜木連

・秋の田を扇本でおつぶさき

・天明三年天印の巻頭吟 桜木連

・星だたり月夜に後家が二人出来

・天明八年天印の巻頭吟 桜木連

・梅花を折って御二人リへ二十万

右の様に、菅公(実是天満宮)の梅針も、その子孫が前田家だとする川柳子の筆法に従って、この句も加算してみると、十萬石以上の大名の紋章を詠んだ四十句の中、七句が巻頭吟に採られている。川柳評万句合に對する投句の数千句に達することは敢えて珍しいことでなく、一万句以上の時が屢々あったことを考えると、一見狂句的な句と見做され勝ちな、この様な句が、高率に全勝句の巻頭に据えられているということは実に驚くべきことであらう。

これについては、高番句に据えられるものは祝賀的な句、神仏尊崇的な句、一歩進めて考えると將軍家礼讃の句が主なるもので、家紋は元來伝統を貫んだ折目正しいものであったということが想起される必要がある、柄井川柳の興行政策の方から考えると、取次句数の多い組連に對し、その組連の取次いた句の中から高番句を選んで、巻頭吟或は次吟にしたものであることに思い当たる。

千句以上取次いだ組連の初頭(多くは高番句)の句の右上に、その取次句数を記して公表しているが、それらの順位は、その組連の取次句数に従っており、例えば、明和五年義印の巻頭の六句を示してみると、

▲御立ッ身八萬騎をハぬけ給ふ

三十四百十三員 市谷田町 はつせ

×大名のちからてふねかよくうごき

式千六百五員 芝字田川東横町 あふみ

○僧正ハくわん女をまたきくよみ

式千三百十五員 山下薩秀堂 さくら木

×水カの日をふり通ふる、御きやう邸

市カへ はつせ

▲けんきやうの娘以上へ遣ル氣なり

八町堀長嶋町 かふと

▲御しのひあやめの中にかきつはた

芝 あふみ

右によって巻頭吟や高番句の句柄と、これらが組連に対する表聲、奨励的なものであったことが知られよう。従って、前に掲げた紋章吟の八句も、強大組連たる初瀬連と桜木連に独占されてる感があり、それ等の八句の中の四句迄が梅鉢紋の句であったのであるが、「柳多留」の編者がこれを探らなかつたのであって、今迄梅鉢紋の句が詠まれなかつた、めではなかつた。

この様な推移を経て、天明期に初めて「柳多留」に採られた梅鉢紋の句が次の三句である。

○梅ばちがあたつてへびにせめられる

(二一・ス6)

II 加賀百万石を乗っ取ろうとした大槻伝蔵に加担した老女浅尾は蛇責めにされた。

○梅柳両木クすでに並ぶ所

(二一・ス2)

II 柳沢吉保はその室お殿の方をして將軍綱吉をたらし込ませ、百万石のお墨附を得たと伝えられている。梅は前田家の紋であるが柳は柳沢を指している。

○かゞもんもきつとしたのは光るなり

(二三・36)

II 右の「かゞもん」は友禅模様様の加賀紋と加賀の前田家の紋とを掛けている。前田百万石の紋は金紋の梅鉢となっている。

今迄、「柳多留」に収められなかつた梅

鉢吟が、天明吟に至って初めて採られた理由の一端を、右の三句によって考えてみると、先ず何よりも、天明川柳点の狂句的表現の流行に合致した句であったからであろう。

梅鉢と梅の韻、加賀紋と加賀の紋を掛けたたり、前田百万石を梅の木で梅沢のお墨付だけの百万石を柳で表現して、二つの植物を並べたりするやり方で、当局の忌む現実社会を写したり諷刺したりする吟法は、この様に紋章を狂態的に表現することによって回避することが出来、もし手心を加えて表現するならば、高番句に坐することもできたのであつた。

次の雀吟は受取り方によっては、普通の吉原雀の句ともなり、竹に雀の伊達侯の紋にもなる。

○よし原で雀といへば恋になり

(寛元・満一) [三〇・17]

狂態的な天明期の句には、一見謎の様に思われる句が多い。次の句なども此の種の代表的なものである。

○日あたりがい、で大きな露が生え

(二三・25)

大露は秋田の名産であることを連想させられる。然し、類句を知らない限り意味の分り難い句である。

秋田に名題の大露の生えているのは、殿様の紋までが日の丸(扇)で、そのために陽当たがよいからだという洒落であることに気付けば思いあたる句であるが、これは専ら知的遊戯の句と言えよう。尤も、正確には佐竹紋は「五本骨扇に月」であつても、日の丸扇と俗称されておつて、既に明和三年

及安永七年の万句合にも、

御料理の露は日の丸程に見え

(明三・宮3)

腹癒せに日の丸程なふれを出し

(安七・龜2)

という句が作られていたが、これは佐竹侯が同僚の諸大名に自領の大露について、手真似で得々と自慢をした処、「そんな大きな露がある筈がない、嘘だ。」と、侮辱されたのを口惜しく思つて、秋田から大露を送らせて、それらの大名達を饗応して腹癒せをしたという余り一般的でない話に立脚して作られている句に過ぎないので、「柳多留」に採択されなかつたのであろう。

同じ佐竹紋でも「日の丸」の方でなく扇の方を狙つて詠んだ句は、分り易い所為か万句合の巻頭吟として高番の誉を担つたことがある。即ち、既に前に一回掲げた次の句である。

○秋の田を扇一本でおぶさぎ

(天元・智1)

落語的に考えたら、「日あたりが言々」の句の面白いことは勿論であらう。これらに拠つても、天明期の「柳多留」の編者の好む処が知られる。というのは、この頃の万句合は前句題に全く拘泥せず作つていたから、「前句を取り去つても意味が分る言々」ということは問題にする必要がなかったからである。

榊原の源氏車の句も「柳多留」に見えるが、既に面白い趣向も尽きて了つたらしく、対立句的な句と既に詠まれた趣向の二番煎じとなっている。

○仕合せは車むごいは秤なり

(二三・13)

松浦の梶葉吟も榊原の源氏車吟と同様で、安永の梶葉吟の焼直しと考えられ、句としては何の面白味もないものになり、山谷通いの蕩児が猪牙舟の上から眺めた松浦屋敷の椎の木縁語として梶の葉を持ち出したのも悪い二番煎じと考えるより外はあ

るまい。

○車座にならび高尾が機嫌とり

(一七・43)

た、川柳翁の追善句会の際に詠まれた句、

○中カ入後源氏車に高尾山(二四・34)

角力の見立何らしい一句が見えるが、この頃既に呉陵軒可有も亡く、右の評者は葉

十となっている。

松浦の梶葉吟も榊原の源氏車吟と同様

で、安永の梶葉吟の焼直しと考えられ、句

としては何の面白味もないものになり、山

谷通いの蕩児が猪牙舟の上から眺めた松浦

品質優良

タチカワペン

TACHIKAWA PEN

大坂市東区高麗町一丁目十一番地

立川ペン先株式会社

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ面紙



詠 近 舟 同

○かぢの葉よりは椎の葉を人が知り

(二一・22甲)

以上、天明期の武家紋章吟を通過してみ
ると、句の数は安永期の半分に過ぎず、紋
章の種類も安永期の十六種に対し、天明期
のそれは九種となっていて、多様性に於い
ても劣っている。なお、宝暦の紋章は二種、
明和の紋章は八種であった。

全体として考えてみると、武家紋章吟の
様な詠史的性質をもち、狂態になり易い句
は、俗史俗説を内容とし、それを家紋と結
びつけて表現しようとするため、知的狂
態的になり易いので、この傾向が安永の現
実回避や狂句的傾斜とマッチしたために、
川柳点が墮落の徴候を示し始めた安永期が
反って紋章吟を多く発生させる温床となっ
たものではあるまいか。

一般 紋

「柳多留」に収められている天明期の句
で、注意すべきは、「紋付けの」句が三句
迄も見えろということである。

然し、川柳評万句合の中で紋付けの句は
三十余句発見され、その過半数は明和吟で
あるのに天明吟は五句に過ぎないから右は
時代風俗の反映というよりも、編者なり読
者なりが、この賭博的な紋付けの句に興味
をもって来たからであらう。

天明の紋付け吟の二句は、鴨を賞品とし
て詠んでいる。

○おかみさんおめへだと鴨下げて来る

(一七・3)

○下女鴨を何にすべいと銭で取り

(二一・22乙)

○紋つけにかけちや手の大きいかこひ

(一七・42)

「開者があちらこちらの紋付けに加わ
っていることであらう。

右を見ても、紋付けの得意に女が多かつ
たことが知られよう、大紋の万才の句と
して、

○大紋は笑顔上下泣きつら

(一七・2)

「上下泣きつら」は義太夫等の泣
き語りでであらう。

○鳥帽子大紋でさんまを二つ買ひ

(二四・23)

なお、目黒にある比翼塚に因んで、比翼
紋の句が初めて見えて来た。

○比翼紋目黒へんからはやり出し

(二四・11乙)

東京都 富士野 鞍馬
ライターの石にも似たる人生か

大阪府 橋本 緑 雨

梵鐘の余韻に寄附は云うて来ず

温泉宿口をすゝぐに海が見え

老人の事故つまづいた石を除け

須賀市 高峰 柳 児

看護婦の私服試歩の目撃しませ

病人の勘が看護を手こづらせ

金をたしかめて示談の背を向ける

悠々と車を除けさす白い杖

倒産の労組強気のやりばなし

胸張って試歩はまぶしい陽を泳ぎ

和歌山市 秋月 宏 方

美容体操白髪染めてるとは見えず

カーテンでここはわたしのお部屋です

青年はきらう故郷の平和な灯

カギツ子はみんな帰って団地の灯

博士にもならず書店の経営者

二度の縁つまり人生二本建

今治市 長野 文 庫

人に損かけたのはカットする自伝

広告資源アングルの記事没とする

入試パス町中ふれて廻り度い

恵存の本もついでに売る非礼

面倒なメニューは止める共稼ぎ

今治市 月原 宵 明

散髪のが「アトム」へばかり向き

その他「龍紋」というのが詠まれている
が、句意が不明であり、後に残った句をす
べて示してみると、

○定紋であたりをかこふよい花見

(二四・26)

○金になるそうで留守居の紋をつけ

(二〇・4)

○留守居役の役得を言ったものか、

○会津屋で捜したといふ紋所

(一七・39)

「会津屋は漆器店であるから、自家の
定紋入の出来合の調度を捜したとい
うのであろうが、これだけでは何を
言おうとしているのか、不明であ
る。

誰かしらマスクの奥で笑いかけ
ちよつぱりと春の光の留置場

人情のよさはモンペにまだ残り

ここで水飲むと原稿印あり

キャバレーの闇でゴミ箱漁る影

薩の臺明治の祖母の在る限り

桜散る尼僧変らぬ無表情

白バイの追跡を見るバルコニー

居らんと云えが聞えたがひき下り

公私混同大きく傘にかかって来

朝礼の一番うしろ遅刻組

お見事と言われない気に乾した酒

食ってゆけるかに顔色さつと変え

名古屋市長谷川 鮮 山

万葉

北川 春 巢 選

奈良県 草 深 醉 升

蜘蛛が餌待つ恰好で周旋屋

先祖の田売って儲けた家を建て

金とひま出来たか趣味も変って来

寝すごした朝へスモッグ注意報

すぐ横の席も白髪でホッとす

春眠が電車の中でまだ続き

倉敷市 水 粉 千 翁

頂上へ来て死に場所を見失い

やりくりの妻も或る日を匂わせる

あしたなどわたしにないとおんな燃え

使われる身でもどてらの夜があり

仙台市 平 野 光 道

共稼ぎ夜のテレビも交代に

フッシュンシヨ一明治は挙かため見る

ご想像に任せてブロック塀積み重ね

デモ乱闘の世に君が代を歌わせる

岡山県 直 原 七 面 山

手招きへ女後れ毛かき上げて

抱きとめてくれる女房がおって無事

車反寿子嬢に捧ぐ(二句)

寿子さん恋には弱い生れつき

寿子さん乳房の疼く夜を迎え

岡山県 永 宗 宗 義

日溜りで臆面もなく色ざんげ

落ちて行く女の姿美わしく

本当の味方は怒って泣いた妻

今治市 長 野 文 庫

背番号子供同志がうばい合

お座敷へ一番きれいなカレンダー

町中に住み小ざかしい子に育ち

大阪市 藤 富 淀 月

モーニング買わず定年来てしま

酒の出る気配へ下戸は去に支度

プロ野球すむとステレオ夜を更かし

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

灯をも少し消さぬ輸血にて

孫乗せて遊べば愉し大あぐら

金貯めていても貧しい歌作り

鳥取県 清 水 一 保

共稼ぎ貧乏つけ入るすぎがなし

高い酒飲ませ酔わせて奉仕料

カナリヤの恋は金アミ越して燃え

奈良市 村 上 春 巳

むしたオル床屋に処世観を聞く

信じないみくじ引いてるハイキング

観光のお寺有料駐車場

今治市 月 原 宵 明

転宅の荷物のなかのアロエ枸杞

ボーリング順待つ女脚を組み

県警の窓からトロポン聞える夜

京都市 松 川 杜 的

納棺へ臍の緒の在りか見当らず

ナンバープレートを覚える癖もつけとく

オブラート一枚もつたいながら祖母

香川県 三 井 醉 夢

マスカラをつけてもらって妻おどけ

執念の怖さ七十厚化粧

時速九〇この世の憂さをふきとばし

今治市 越 智 一 水

物価高低賃金へ妻の皺

ジェット機の音質上げをはばむ音

どぶ川の流れ汚職のあるかぎり

大阪市 西 本 保 夫

平社員気魄軍隊回顧談



なまじつか白髪もはずかし平社員

兵庫県 常岡 考風

夕焼はいのちを削る女給の詩

愛の巢は屋根裏ですとたのもし

大阪市 福井 野迷路

ひいき相撲勝った瞬間の疲れ

坊主医者先生風呂敷だけ返し

大阪市 森川 すみれ

凝視する夫婦の業の泥沼を

夫の目うつろ私の目もううつろ

加賀市 木村 一路

身を焦す程のチャンスも無くて老け

湯の宿の湯の香が淋し一人旅

枚方市 宮川 珠笑

金釘で値上反対署名する

観賞者に混り反応確かめる

大阪市 和田 締亭

愛も徐々に金欲しそうな顔を見せ

焼跡に立って保険を思い出し

和歌山県 山本 定男

合格を祝い入学金に泣き

杓子だけ残して権しい成長期

武器持てば大人もチャンバラしたくなり

白髪首仮装敵国考える

玉島市 井上 旭峯

貧しくも眠りは安し古畳

穴一つ隣りへ貸したままとなり

大阪市 坂井 秀夫

壁の穴ふさぐ役目のふるい地図

そろばんをはじく浮気はたかが知れ

宮崎市 野口 卯之助

本当の親と思えぬものに父

はれものにさわる思いの雇い人

京都市 室井 八九寸

月の恋猫をクサリの犬叱る

黒卒の失策までを褒めたたえ

神戸市 吉田 隆史

入試すみ野球も相撲も面白し

エスカレーター素見に慣れた足ばかり

大阪市 今井 章子

愛しい人私の陳列棚の何を求む

もうなにも考えますまい恋の奴隷

大阪市 川口 弘生

寒村の駅員延着こせつかず

つけまつげしたのが大根値切っている

割引きをして聞け酒の力だよ

月が見ていますわ話題そらされる

鳥取市 近藤 秋星

遠縁の娘ということにして会わせ

再婚の話になると娘は黙り

宿毛市 渡辺 伊津志

七尾市 松高 秀峰

肩書の名刺に敵の多すぎる

羽咋市 三宅 ろ亭

早春の路やたらに歩みたく

大阪市 谷本 泰山

ならび行く女の足の品さだめ

大阪市 木村 濁水

手遅れの人間像にメスを入れ

大阪市 多田 富士

紀元節気兼ねしながらお赤飯

大阪市 田治 一登

孫からも年賀状来る年となり

大阪市 花田 繁子

芸無しは見たり聞いたり食べるだけ

大阪市 田中 多幸

新玉の娘の年を又数え

加賀市 大山 雅城

農繁期手伝う約束嫁に出す

岡山県 牛房 謙士

残り寒女の足へ緋がこぼれ

倉吉市 奥谷 弘朗

旗ふった闘士ものこのコバチンコ屋

大阪市 谷沢 源川

鬼は内ゆっくりテレビも見て居れず

大阪市 大池 芳

鯉幟又はメーデーの思い出

・特集・

鯉幟又はメーデーの思い出に付いて
というアンケートに回答してもらっ
たのです

(編集局)



大阪城の公園

若本多久志

淀君の眺めた堀へ労働歌

(句主不詳)

大阪城の公園は毎年メーデーの集会場になっているが、昔この城の天守から、秀吉や、淀君が城下の堀を賞でたり、青々とたゝえる堀の水を眺めて、天下太平を謳歌したことであろうに。

メーデーに参加もせずにパチンコ屋 (水堂)

労組の末端へくると、このてあいが非常に多い。然しこの種の従業員は平素会社にとってもプラスになっていない者であることを、労使共に再考すべきである。

子が見て、メーデーの父少して (句主不詳)

信念のないメーデー参加である。働く者の祭典に、スクラム組んで堂々行進する姿を肉親に見られてデレる様では労働運動もまだまだの感が深い。

労働運動の

黎明期

吉田圭井堂

メーデーには色々思出いがありませんが、私の特に印象に残っているものに大正の末期今の社会党の前身友愛会が鈴木文治の手で結成し、当時の進歩的な人々に依って支持され堂前孫三郎が初めて国

際労働会議に日本代表として歐洲に派遣せられた。之が日本の労働運動の黎明期であったと記憶しますが、その翌年のメーデーに当時私は全国で最年少者の社会教化委員に大阪市から任命されていた関係上、自発的であつたか誰かに要請されてか覚えませんがそのメーデーに見学者として参加した事を憶えています。

よく晴れた日で大阪天王寺公園の広場に集合した大衆が赤旗を先頭に威風堂々。下寺町松屋町を北進天神橋から中之島、剣先に落付き大会の宣言や決議を行なつて解散したのですが、行進中先頭旗の近くの者はインターか何か歌つていたようですが、後続の人々はめい／＼流行歌をうたつて、プラカード一つない静かな行進で今から思えば上品もええとこなメーデーでありました。

亦労働組合員と警戒に当たる警官や新聞記者とか私等のような見学者等を区別する為(警官は全部私服)その私服の襟に文房具屋に売つてゐる針金を曲げた大きい方のクリップを挟み止めてあり新聞記者や私等は小の方のクリップを一個ずつ呉れそれを同じように挟み止めて列の外側に従いて行つたものです。今のようなとげ／＼しいメーデーを目の当たり見るにつけ途中休憩の時には互いに道端へ座り込んで話し掛けたり、煙草の火を付け合つたり、のんびりした風

景でさも労働者の祭典を我人共に祝つていと云う光景でした。それを憶うと全く今昔の感に耐えぬものがあります。

ト
ご協力どころか勝手にやったス

おつきあいに

尼緑之助

出雲市と言へば小さな町で、後進性が云々されている土地柄だけに、派手なメーデーは見られない。従つて感銘深い句が生まれよう筈がない。

確か、小西雄々君の句?「おつきあいに仕方なしに歩いている」という意の句があつたが思い出せない。

十数年前、メーデーの終結場所が市長代理として矢面に立つたところがあるが、近頃はまことに低調のようです。

高さを競う

小西雄々

昭和二十七年、長男が生まれてはじめての端午の節句に、鯉幟を上げた嬉しさは、今も忘れることができない。

他所よりは高く上げたい鯉幟

雄々

たとえ清貧に甘んじていても、隣近所の鯉幟より少しでも高く上げて、その前途を祝福してやりた

いという気持をまとめた句です。
紙だとは知らず喜ぶ鯉幟

雄々

それから二三年たつて、鯉幟の数をふやすため紙製の安物を買つて一緒に上げた。無心な子供は紙の鯉幟と知らず、その数がふえたのを喜んだものです。

長男はその後すくすくと成長し、中学二年生となりましたが、今年も薫風の天空を泳ぐ鯉幟を見ると、当時の事を思い出すことでしょう。

猫も杓子も

河村日満

私が鳥取でメーデーに参加した最初のものは、昭和二十一年だから第十八回メーデーという事になろうか。当時まだ会社に入社して半年そこそこだし、会社の労働組合が出来たのが同年の二月十一日だし、「猫も杓子も参加せよ」とばかりの元気だったようだが、何せ県民の足を預るバス会社の組合とて、皆が皆出てしまえばたちどころにストライキと化すおそれがあるので、そこはそれ適当に会社と話合つて非乗務員の何人かが強制参加させられる事となり、その中に私も選ばれたのが組合役員に関係を持つキッカケとなつたようである。

兎に角このときのメーデーでは議長が馬に乗つてデモ行進の指揮

をとっていたのと、ときたま労働歌をわめいては鳥取市中をぞろぞろ歩いたのと、散会したあと誰の奢りか知らないが大いに飲ましてくれたのが印象に残っている。

作品では川柳雑誌以外の柳詠を読んでいるので、残念乍らメーデーを詠んだ佳句を知らない。句集「私達」の中になった一句ある「メーデーに参加もせずバチンコ屋」水堂さんの句が記憶にあるくらいである

蔵の二階

浜田久米雄

ぼくは三人兄妹の男一人、女二人という生れ合わせになった。母の里が兄妹の二人兄妹であったので、ぼくの誕生日に贈られた鯉のぼりは一つであった。これを今から思い出すと青空高くへんぼんとひるがえっていた印象はほんやりとしてよくわからないが、なにか黒い大きな紙の鯉を「くら」の二階かどこかで見たことはたしかにあったと思う。小学校を神戸で過したぼくには他人さまののぼりを見せられただけであるが、かすかに残る鯉のぼりの思い出しは、ま思い出してはなつかしい限りである。

よくもまあ生んだと思う鯉のぼり
鯉のぼり一年生まで育てあげ

柳風子

づばら者

児島与呂志

五月一日労働者のお祭りであるメーデーも柳人の皆様には余り関係の無い方が多いようで、メーデーを読んだ句が少ない事でわかる。私自身も労働者で、十八年間交通局に勤めながら五、六度ぐらいいしかメーデーに参加していない。時に勤務実体がその様にある故であるからではあるが、

メーデーにすばらな奴の声が
れ

香林

わかるように思う。スト・デモなど組合的な事に一生懸命に成るように成ると一般の方々からは、すばら者に見える程その事に専心する結果その仕事に対してはすばらな奴と見られるのだと思う。私自身二年間すばらな奴と思われた事を感じている。

都おどりからメーデーの街に出る
薫風

メーデーに参加する事の必要の無い職業職場地位の多い柳人だとは思われないけれど、うらやましい句であると思う。

メーデーに家族そろうたピクニック
与呂志

私の希望は労働に感謝する日はスモッグの街でデモより美しい空気の中で家族そろって楽しむようにすればいい、と思うのだが。

手製の鯉

本田恵二朗

① 長男が生れた頃私は大阪市製で、やかな医院を開業していた。戦時だったので鯉職をあげて派手に祝うこともならず、部屋の中に手製の紙鯉を泳がせて、せめてものお祝をしてやったものだが、その長男が現在医師になつてるばかりか、二月一日に初の桃太郎を創作して私に爺という肩書を附けさせてしまった。そこで鯉職を威勢よく泳がせようぜと張り切ったのは長男ではなくてこの爺の方なのである。同時に爺馬鹿とはなんとうれしきものであることも発見した次第である。

② 親の夢子の夢はずむ鯉職

恵二朗

矢車が歌えば麦の穂が踊る

同

矢車の音さわやかに初節句

同

楽しい夢

山内静水

萌るような新緑の野山澄みきつた空、「鯉のぼり風をのんでる泳いでる」小六日出夫(会員)マ鯉ヒ鯉、カラコロと廻う、矢車の音を子守唄でも聞く如く、ぐっすりとは非番の休養がとれる四季を通じて私の一番好きな季節である。今は四人の子の親として、五十

に手の届かんとする私は、三人目に日本男子として、この世に生をうけ貧しい中にも祝福されたらしい。祖母が祝ってくれたと言う、かなり色あせた布製の三米ぐらいの鯉を、五十才で亡くなった父が、樽杭(四斗酒樽)にかけたる太縄を作る止杭)に、しっかりと取り付けた長い長い竹竿に、小さいな姉と、上げたり下げたり、時には鯉の大きな口へ頭を突こんだりしていた事が楽しい思い出として残っている。他に土で作った鼻や指のこわれた武者人形を飾った事も覚えてる。

それに引換へ長男は私がラバッルへ三年半程島流しになつてる間に生れ、復員した時が四才で鯉のぼりの思い出はないらしい。

孫が出来たらその時こそ、デッカイ鯉を泳がしてやろうと楽しい夢を見ている。

鯉のぼり五月の空が待ち切れず

凡柳

五年前のメーデー

藤井明郎

① 働く者の祭典、五月一日のメーデーの思い出は、浅い、若い人と四十才以上では多少のズレは争えない。五年前頃のメーデーは、労働歌を唄い果は横隊ごとに、右へゆれ左にゆれジグザグの行進がはじまる。ワッショイ、ワッショイ、と、行進を見ていた弟の子が「あーおっちゃんや、あそこだ」

と大きな一声を私に発した。多少恥しみを覚えていた所へ、人の視線を意識しながら若い人の中へはさまれて、いやはや赤面を感じた事をご想像下さい。その後メーデー行進は家族連れのみる光景となつたのは、爽やかな初夏の景物詩となつて楽しい祭典である。

② メーデーを爽やかにする家族連れ

口紅をひきメーデーの列に入り

メーデーの先頭をきる嫁ぎ遅れ

メーデーもストップしてる赤信

号

メーデーも警棒手持無沙汰なり

メーデーの苦さ巻へ出て流れる

明郎

同

黄銅六角ボルトナット及び特殊挽物全般

合資会社

西出螺子製作所

大阪市天王寺区宰相山町142
TEL(761)3452~4
夜間(762)4408

近作柳樽の

選をして



川村 好郎

本年一月から「川柳雑誌」の近作柳樽の選をするようにと路郎先生より仰せ付かった。

さて選をしてみると想像していた以上に苦勞である。又難しいものである。難しいのにも色々あるが、初心者の方がズラリと二十句を書き並べていられ、折角の投句であるからせめて一句は抜いてあげようと何度も読み返し、余り作り変えれば作者の句想をも変えてしまうので、少しの添削でもして抜こうとするとなかなか難しい仕事である。その一人にAさんがある。以前から見慣れた雅号であるので試みに「川柳雑誌」の古いのをしらべてみるとAさんは三年も前から殆ど毎月近作柳樽に投句していられ、殆ど一句か二句しか載っていない、時には全没か名前がないのを発見して私は驚い

た。即ち少しも進歩していないと云うことである。

○
 叔はそのまま置いておけば朽ちるだけで稲にならない。叔を大地に蒔き天地の恩恵に浴さねば稲にならない。しかし如何に大自然の生々化々の働きを受けても、百姓が育て、草を除き、肥料をやり、如何にして良く早く育てるか努力しなければ稲にならない。更にこれだけでも足りない。叔自身が大きくなろう、生きてゆこうとする力がなければならぬ。しかもこれ等が渾然一体となつて時間、時を得なければならぬ。米になるにもこれだけの要素が必要である。米だけではない。如何なる事業にも同じ条件が要る。それを人間の才智、全力のみにて何事も出来るものなりと思つたり、我が腕一つ

にて成功したように思い上がるところに大きな誤がある。又すべてあなたまかせ、棚からぼた餅式に人生を考えることも間違ひであり、人を頼り、人の援助のみにする生き方は落伍のみが待っているのである。まあまあ時間、年数さえ経てば何とかなるだろう、チャンスだ運だと思つのも考えちがいである。

○
 Aさんは生活環境には恵まれているらしく、又御自身作句しようという意志もあり、三年近い時間も掛けていられるが、一つ足らぬものがある。即ち育ててくれる百姓がいないのでこの叔が成長しないのではないかと思つた。○〇県○〇村とありますから、川柳同好の人もなく共に研究し、励み合う事も出来ず、句会もなく、よき指導者もないので句を批判し、添削してもらふことも出来ず、ただ自分で勝手に作り、投句しつづけていられるのではなからうか。そして川柳雑誌を手にした時、一句抜けた二句載つていと喜ばれるだけで、他の人の句を味読されることも少ないのではなからうか、又何故没になったかを吟味し、教示してもらふ先輩がないのではなからうかと思つた。私はこのAさんを非常に気の毒に思い、参考にな

るべき一句を取り上げて、いささか批評を加え、もつと佳い他の人の句を読まれる事をすすめ、及ばずながら導きますから勉強して下さいと書面を差上げておいた。

私などはよき環境に恵まれ、路郎先生を始めとして諸先輩にもまれ、指導されつゝあり、しかも廿何年という時間を掛けているが、肝腎の叔自身にもつと進もう、新境地を開拓しようという意欲が薄く、ひとの句はかれこれと批判はするが、ありきたりの句を作り、新進の作句熱の燃えている作家に負けているのである。二十年、三十

酒

清



灘・魚崎

金露酒造株式会社釀

年、と川柳を作つて来たその経験は尊いことであり、流石はと思うような句を作ることもあるが、その長い間の柳歴があるということ

を忘れてはならぬと思う。

次にBさんからこんな便りを直接私が受取つた。「今度先生が近作柳樽の選をされるそうですが、先生はどんな句がお好きですか教えて下さい。少なくとも毎月五句以上は雑誌に載らないと同輩の人や家の者にも鼻高く出来ません。どうぞよろしく頼みます。」という意味の手紙である。

Cさんからは次のような手紙が来た。

「一度でよいから近作柳樽のトップに私の句を選んでほしい。先生は甘いものがお好きですか、辛いものがお好きですか云つて下さい。すぐ送ります」と。川柳の世界まで買収、贈賄が延びてきたのかと驚いた。

こんな事で天位になろうが、十句抜けるが、トップになろうが何の価値がありましようや。成る程天位も嬉しいにちがいない。又時々天位や沢山入選してこそ、元氣も出、句も上達することもあり、もう川柳を止めようかと思ふ心を止めてくれるであらう。天位も嬉しいし、これを大切にすると共に、没句も又よきかなで、何故に没になったかと研究することも忘れてはならない。ペテランばかりの大会へ恐るることなく出席するのです。本社句会にも堂々出席

投句をすれば全役も又愉快であり、どんぐりの背くらへやドサ廻りで天位になって自惚れるより、どれ程勉強になるか知れない。

先日テレビの人気番組の「木島則夫モーニングショー」を観た。柳家金語楼がゲストとして出場しこんな話をしていた。

金語楼がまだ若い時分、落語家として寄席に演っていた頃のこと、舞台上で落語を一席演る時に二つの扇を持って、落さぬよう舞う演技があった。或る時自分の出番迄に楽屋で座蒲団を置いて、二つの扇の使い分けの稽古をしていた。なかなか下に落さずに扇を使うことが難しいので繰返し繰返し稽古をしていた。それを同じように出番を待っていた、当時寄席芸人として三味線では日本一という立花家古之助という師匠が、金語楼さんの稽古を見て、

「この三味線の胴の上に坐って稽古をしてみなさい」という。金語楼さんは驚いて、云わるるままに三味線の胴の上上がった。たちまち胴は破れた。立花家古之助さんは、その破れた胴の三味線を持って舞台上に出て、ものの見事に弾きはじめた。終って金語楼さんに、

「明日私の宅へ来なさい」と云

ってその寄席を出て行った。金語楼さんは仰せの通り翌日師匠のもとへ行った。見ると胴の破れた三味線が幾つもあった。

「完全な三味線で稽古することも大切だが、いっどんなことで糸が弾いてる最中に切れたり、胴が破れるかも知れない。そこでまさかの時を考えて破れた胴の三味線で弾く稽古をするのだ」と

と教えた。それから金語楼さんは安全な座蒲団の上で扇を使う稽古を止めて、毎日橋のらんかんのところで扇を使う稽古をした。

即ち川へ落ちるというぎりぎりの所で稽古をしたのである。最近金語楼さんは東京、名古屋と喜劇で廻って来て、扇を使う場面があるが一度も失敗したことが無い。これはいつも川に落ちることを考えて扇を使っているおかげであると云っていた。なかなか面白い話であり、我々川柳をたのしむ者にもよい話である。

○

NHKテレビに最近「太閤記」が連続ドラマとして登場している。何故現代に立身出世、戦争に明け暮れた太閤記をとり上げたのかと不審に思っていた。演出の吉田氏がその事をこう云っている。

現代の人々はややもすると安易な生活を願う、少々誤った道を歩

んでもよい、ごまかしてもよい、食うことに困らぬことだという生活態度である。ところが太閤記の時代はすべての人が生死を賭けた毎日であった。桶狭間の戦いに今川勢を攻める織田信長が「死のう一走」と叫び死を覚悟の一戦であった。この一か八かの生活が現代にも必要でなからうか。ぎりぎりの時に節操を失わず、厳しく生きるに邁進することを忘れてはいないか。これが太閤記を採り上げた一つの理由だそう。

○

偶然にも宝くじが当たり幸運児と喜ぶ、如何にも幸運であろう。しかしそれが為めに職を捨て競輪麻雀に耽り、働いて願う心のみ強くなって遂に身の破滅に泣いている人を知っている。宝くじが当たり何百万円を手に入れたことは祝福すべきであるが、その使い方、生かし方が間違えればむしろこの幸運は不幸である。器用に作句して初心でありながら人々からもてはやされている人が、川柳とはこんなものかと早合点し、その後は進歩せず、遂に折角の川柳の素質を十分持ちながら、消えてゆく人を私は多く見ている。

先夜私はうちの炬燵の中で一生懸命に作句していた。家内が風呂がわいたから入ってくれとすすめに来た。しかし今句想がまとまり

かけていたので返事もそこそこに句の産みの悩みをつづけていた。すると又家内が私の無念無想にむずかしい顔をしているのを見て、「早く風呂へ入って下さい。ガスがつき放しです。川柳も大事か知らんが片付きませぬ。」といきさか不平の面持ちである。そして「一句も抜けなくても一年浪人せんならんことは無いし、天を取ったか、ハワイ御招待、副賞二十万圓貰えるわけでもないでしょう」と。

のである。そして出来た時のうれしさは憚得でないのである。恐らく釣りも同じであらうと思う。他人から馬鹿げてみえる糸をたれてデット水面の動きを見付めているその間が無上の喜びであらう。

一銭一厘の損得に懸命になっ

ている商人や、一時間の残業も手当を貰い、無償では働かぬ給料取りが、全く別世界の句会に出席したり、作句したりそんな時間を持つてることを私は倅せと思う。

川柳に惚れること、好きであること、これがそうさせるのである惚れることである。好きでたまらなくなるのである。そこから名句も生まれよう。自ら絶えない努力も出来、人生の真の喜びも味わうことが出来るであらう。

一著名作家の川柳句集一



定価 300円
送費 50円

浜田久米雄著 麻生路郎序

★本句集の著者浜田久米雄氏は岡山の産。多年不朽洞会員として又国鉄川柳人として古豪の名をはしいまにしている。三十余年の柳歴を飾る数千句中より百句を自選し、各句に感想を附して世に問うもの。

★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。(切手代用可)

大阪市住吉局区内万代西5丁目25

発行所 川柳雑誌社

電話大阪局6081振替口座大阪75050

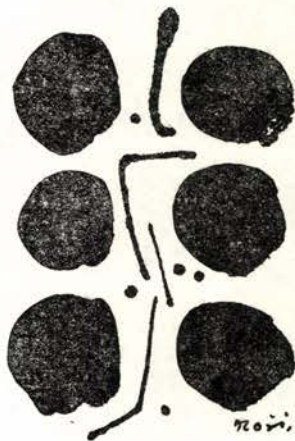
集路一

客休秋
水半文
本弘井
正国金

窓越し

正本水客選

窓越しに留守を頼んでから出かけ 譲士
鍵をすれ窓越しをして室に入る 泰山
窓越しに空をみB.G.悩んでる 独仙
窓越しに景色たたえるバスガイド 繁太郎
窓越しにお祝いの餅屋台から 八九寸
窓越しに琴をたんとする白い指 鶴丸
火葬場が窓越しにある団地なり 素身郎
金繰りに疲れ窓越し青い空 万竿
窓越しに呼びとめられた不俸せ 伊津志
窓越しに千円ちよつと借りる仲 愛鳩
窓越しの女病棟歌が漏れ どんたく
窓越しの夫婦けんかは派手に見え 松風
窓越しに望遠鏡の悪い趣味 滋雀
窓越しに遠火事風の無い安堵 光郎
病院の窓越し世間の春を見る 勝子
窓越しに見る正札の零の数 芳仙
窓越しに検針表を渡しとき 木魚



窓越しの眺めに家賃不服なし 野迷路
窓越しに蕉の舞うを感じおりろ 亭
窓越しに光る地球は青かった 可住
窓越しの監督の目がゆきとき 伊久野
精薄児窓越しに遠い空見てる 正男
窓越しのサイン鏡で照らされる 宗義
窓越しのキスガラスのくもりよう 章子
窓越しに朝の空気を深く吸う 卯之助
弁当が窓越しにきて温かし 旭峯
窓越しに呼ばれ出てみりやもう居ない 隆子
窓越しに聞けば隣りも倦怠期 雄々
窓越しに首ぞろろろと救急車 保夫
窓越しに入學式の話など 信二
窓越しに遠い山火事ながめてい たけお
嫁の荷がえんやらえゝと窓をこし 静水
窓越しの春に流感まだ癒えず 酔夢
窓越しにブライバシーをちとおかし 痴亭
出勤の空窓越しに確かめる 晃男
窓越しに声かけていく下駄の音 正夫
窓越しに見ても拝観料をとり 幽谷
旅馴れて車窓の富士を見ず過ぎ 雄声

窓越しに隣りの景気見て戻り 代仕男
窓越しに送られてる見舞客 千翁
窓越しのデモへ社長の冷たい目 井蛙
窓越しに雨よと干物指差して 章雅
窓越しに明日のブランの打合せ 藤波
佳吟
窓越しに西陽が壁に突きあたり 李鳥
窓越しにパイパイする子にパイパイし 秀峰
さようならまた窓越しに手を振らせ 秀夫
窓越しに所得格差を感じ取り 弘朗
窓越しに見えて化粧の瞳が逃げる 初甫
窓越しに恋を知らないベツカンコ 春巳
窓越しに明日の天気言うて閉め 十九平
窓越しの蜜声 基 仇米襲す 恵二朗
窓越しに見える塔にも四季の色 杜的
人
窓越しに明日はスキーの出来る雪 古心
地
ガラス窓さみしい子供唇をあて 清人
天
窓に顔あつめて送る退院日 淀月
軸
雨あがるらしい窓開けて閉め 水客

足場

国広半休選

メガホンが足場叱って舗道混み 清人
もう足場作って垣を腫が越える 伊津志
塗粧すりやアもう用のない足場 繁太郎
釣れそめてからは足場を洗う波 代仕男
足場組むトビ職大工へうなづかず 宗義

ライバルが顔れ足場が縁くすれ 野迷路
出馬する腹が足場を固めだし 弘朗
丸太足場パイオ足場に見下られ どんたく
子供にはジャングルジムとみる足場 滋雀
時折りは足場固めのお国入り 同
芸能人足場にボスは根を掘げ 井蛙
バウンドもあり張り合いのある足場 千翁
猫ひよいと足場気にせず飛びおりる 章子
大物を足場気にして釣り落し 古心
石ブーム足場の危険など言わず 旭峯
大工と左官足場のことでもめ 静水
足場から消防が行くボヤが見え 保夫
ホース持つ足場へそでに火が移り 章雅

▽応募される方へ△

一路集ランは、与えられた課題をいかに巧みにこなせるかの試験の場所であるから、第一に題を充分に検討して、それから作句にかかるとである。そして出来上がった、出句するまでに、素材の扱い方はこれでよい。字句はこれでよい。類句はないかとかいろいろの点から自分で慎重に審査してから応募していただきたい。

(路)

白バイにつかまったのを見た足場 春巳
トン／＼と踏んで足場を確める 晃男
力学の計算もしてある足場 雄々
トビ職に地下も地上もない足場 静水
或る時は命をたくす足場釘 雄々
病院へかつきこまれた日の足場 卯之助
雲に眼捉われ足場踏み外し 雅城
先生へ足場の上からするおじぎ 春巳
就職の足場作りをする教師 句楽坊

花一枝折るのに足場ゆれている 勝子
もう智恵は足場探して児が屈き 光郎
これ切りの足場背伸して覗き 宗義
ゆすぶって下りろ／＼と云う足場 同
叱られる足場こゝから恐くなり 静水
盛り場を足場にスリをよくかせぎ 伊久野
ビルが建つ足場あふなく見て通り 卯之助
千仞の谷へ足場は揺れており 幽谷
学会を足場に不安のない選挙 藤波
血税がもうビルとなる足場組み 醉夢
親族の足場にされている地の利 旭峯
濁水の足場に迫り渦を巻く 八九寸
成功の足場になった妻の里 愛鳩
罵って見ても足場にされた後 李鳥
捨てられて足場にされた夢がさめ 井蛙
足場だけできて工事ははつとかれ たけお
足場未だ取れず資金がとだえがち 信二
組立てた足場不景氣風が抜け 可住
人生をこゝを足場にやり直す 芳仙
俺の家を足場に浮気とは知らず 素身郎
稼の下力となつて足場朽ち 十九平
足場数踏んでもお氣に召さぬ僕 古心

雨の日の傘が重なる足場下 初甫
米国の足場沖繩いつ復帰 章雅
雀には都合の悪い足場なり 木魚
全快へ登の足場まだゆらぎ 護士
頭上注意なぞと足場を道へ出し どんたく

とまり木の細さを鶏がはかつてみ 護士
再起今秒の足場に耐えんとす 恵二朗

天
足場ばかり見とれば他人に追い越され 藤波
軸
元職場今の足場にしてやかれ 半休

箸
金井文秋選
二三度でヤンキー氣質箸に馴れ 真砂
かす汁に今日の寒さを言うて箸 滋雀
青い目の箸はアップに撮される 同
割箸がボンと割れたを嬉しがり 可住
天ぶらの箸火加減へ油断せず 淀月
母の箸かき餅きつね色に焼け 同
箸とらぬまま花嫁は立たされる ろ亭
割勘と知つて下戸の箸捌き 井蛙
感謝する食後の箸は戴かれ 同
拍手する身構えつくる箸を置き 千翁
スキ焼へ育ち盛りの箸の鏡う箸 代仕男
日本語より箸つかい先ず板につく 野迷路
箸一本甘酒文句云わささない 章雅
箸をとる前にと会計報告し 雄声
日々箸の特てる我身が有難い 木魚
ママの箸今度は坊やの口が待ち 幽谷
料理屋の格割箸にも見られ 雅城
新しい出前の箸は藏つとき 同
折詰は箸もつけずに土産にし 同
気の効いた幹事余分の箸を持ち 静水
いただいて箸とる母の古い給い 同
御自慢の洋食母には箸を添え 万竿
並ぶ箸卓上彩る子沢山 伊津志
半分はこぼすのに箸持ちたがり 愛鳩

同権の世に夫婦箸大と小 どんたく
手術めくナイフの数より箸二本 同
外人の手つきおかしく箸を持つ 卯之助
親方と箸は太いが良いと云う 弘朗
日本語も上手箸持っても上手 藤波
茶柱も立ち割箸も真直ぐ割れ 同
児の口にはこぶ左右の親の箸 同
気がもめる話へ箸もそぞろなり 秀夫
ふるびても使い馴れてる 箸がよし 同
牛鍋で兄弟喧嘩してる 箸 旭峯
挨拶が済んで割箸割りはじめ 同
箸持った手がナイターへ進まない 素身郎
箸紙に民謡書いてお湯の宿 杏花
箸ケンときよこい古里の人かい 隆子
握り箸一人前の顔で食い 正夫
妻よりも箸が知ってる好き嫌い 同
根気よく箸でおかきを裏がえし 李鳥
影膳の箸洗う日をまつ女房 句楽坊
うれいある朝とる箸の重いこと 同
もう箸を置く子へ母の眼が案じ 晃男
お箸ささげて感謝の眼をとじる 初甫
恋人の箸に甘えた口をあけ 芳仙
荷いらいと箸小忙し下戸と飲み 痴亭
食べぞめの箸で大方孫こぼし 同
お箸持つお手上げなさい一年生 勝子
箸置いて育ち盛りの何か食べ 同
酢加減は箸で掌に受け紙め見る 光郎
台所に箸など浮いて妻の留守 同
添えた箸とらず握りをつまむ通 八九寸
三日月の言わずにいても夫婦箸 春巳
肩書をはすして夜鳴きの箸をとり 同
とんど火で芋の具合を見る火箸 繁太郎

宴会でしきりに動く下戸の箸 伊久野
一年生箸持つ方が右手です 清人
封建の膳に順序のついた箸 護士
性癖が箸の先から転げ出る 同
正月に海山箸のありてこそ 泰山
南天の箸でも寝込んでいる中風 古心
めったには箸を使わぬつまみ食い 宗義
箸持った顔がゆがんだからし漬 同
親日家の名に恥じない箸さばき 恵二朗
ブラットの立食い急げ箸が折れ 十九平
成長を箸の運びで知らされる 美津代

佳吟
指揮棒は箸クラス会典が乗り 十九平
箸紙と今日で別れの小豆がゆ 章雅
火かげんを油に落す箸の先 李鳥
人生の終りを箸で捨て上げ 幽谷
父の箸待って一家の祝膳 清人

秀吟
割箸をなかなか割らせない祝辞 恵二朗

色紙短冊
書画用品

大坂戎がし
丹月堂
を中七二七二



七面短詩文学クラブ川柳部句会北の新地朝千鳥(和歌山市)
樓上で代選される顔乃女史(向つて左)主催者中野三幸氏
(中央)優勝された里村廣氏(右)

柳界展望

句会

▼本社五月句会は七日(金)午後六時から千日前電停東入ル自安寺で開催する。ゴールデンウィークの一日を願想と句作に送っていただくよう柳友お誘い合わせの上多数のご出席をお願いする。▼七面短詩型文学クラブ川柳部句会(和歌山市)は四月八日(木)午後五時から北ノ新地朝千鳥で開催。▼南海電鉄川柳会(大阪市)句会
は四月十五日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。▼大阪通信病院川柳句会は五月一日(土)午後二時から南館一階別室で開催。▼川維岡山支部(岡山

市)四月句会は十七日岡鉄クラブで開催。▼川維備前支部(岡山県)三月句会は二十一日浜田久米雄居で開催。▼川維岡山県下各支部連合吟行句会は五月十五日(土)午後五時から十六日(日)の昼食まで、湯郷温泉のホテルたかくらで開催。兼題は、宝石(久米雄選)・暴力(方大選)・腕時計(七面山選)・自惚れ(藤波選)・お人好し(一声選)、兼題三題当日発表。▼山南川柳会(岡山県)四月吟行句会は二十五日(日)午前十時から芳園園で開催。▼伊藤茶仏・宮崎やすえ還暦祝賀川柳大会は昭和四十年四月四日(日)正

午から小松市大和町小松市社会福祉会館で開催。▼どんぐり川柳会(羽曳野市)OB会第三回懇親句会は四月二十五日(日)午後一時から大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇大万楼上で開催。▼大陸引揚柳人同窓会は四月六日(火)午後一時から翌七日朝食まで富士山麓須走富岳荘で開催。(14頁参照)
▼池田可智氏(長崎市)歓迎句会
は川柳我楽荘主催で、三月二十一日名古屋西祐寺会館で開催。▼豊中川柳会は四月十八日花見句会を開催。▼第十六回愛媛春の川柳大会は四月十八日午前十時から松山市歩行町PTA会館で開催。▼第九回全国鉄川柳人連盟大会は昭和四十年七月十日(土)午前八時三十分から十一日(日)午後四時までで広島市宮島で開催。兼題は、心臓・スタイル・百円封入の上横四縦縦妻・投句は百円封入の上横四縦縦妻・十三種の用紙へ清記、裏へ記名し、六月三十日迄に信越線長野駅気付長野機関区岸剣水宛。▼第十六回新潟県川柳大会(柳都主催)は五月二十三日午前九時三十分から新津市駅前通り割烹「春雨」で開催。会費二〇〇円、第一部雑詠、三太郎選・朝太郎選(各選者に二句ずつ同一句を禁ず)第二部雑詠、三句は、風柳・涼秋・進一路・比呂夢・千寿・風太郎の諸氏の共選、出席予定者も第一部、第二部雑詠を五月五日まで、新津市駅前、柳都川柳社県大会事務局へ送

付のこと。

消息

▼路郎主幹は三月三十一日肝臓障害のため、大阪日赤病院へ入院、当分加療を続けられる。▼北川春葉氏(大阪市)は四月一日からの医学会内科学会のため上京、三日夜行で帰阪された。▼村田問魚氏(東京都)から「きやりの記念句会が快晴に恵まれて全国よりお集りを頂き私も閉会迄杖の力に頼って帰宅早々臥床。全国柳壇の長老として、私より一つ上の兄さんです。くれぐれもご加養下さるよう三太郎君ともども祈ります。私も主治医より一カ月の安静を申し渡され、服薬を続けることにより、光明一路への第一歩になると太鼓判を押され、すてをきやり社人任せであります。▼清水白柳氏(大阪府)は四月四日小松市の伊藤茶仏氏の還暦祝賀川柳会に出席、大聖寺の柳人諸氏と歓談、故郷での葉参も果された。▼東野大八氏(美濃加茂市)は四月六日静岡岡須走富岳荘で開催された大陸川柳家同窓会に出席、感慨を催されたが、帰路沼津から岐阜まで立ん坊で徹夜という

大和文華館

江戸から静かな大和路が現れた。中座の青い竹が目をやすませる。大和文華館はめぐまれた環境の美術館です。絵画、彫刻、書画、陶磁、漆工、染織など、皇室や重要文化財を多くを逸品を集めています。春秋には特別展も開かれます。(月曜休館)近鉄奈良線・学園前駅すぐ

わけて帰宅後もボーとしていますと。▼月原晋明氏(松山市)は三月、本店業務部勤務に栄転、早々に着任され、別項記載の住居に移られた。▼田垣方大氏(倉敷市)は一月一日附で仕事が変わることになったので勉強のため忙しい日を送っておられる。ここ数年米花見などしたことがないが、新聞で、抑制されていた情熱が一時に爆発したように桜の花が急に咲いた記事を見ますと、春は、やっぱり大声を挙げたがたくなります。▼宮島天真氏(大阪市)から「私」と四月四日午後一時からNHK総合テレビの日本とところどころの番組「僕等」は一年生の中へパッと映し出していただきました。」▼森本法泉子氏(鳥取市)は二月一日から、鳥取県信用保証協会(業務課長)に勤務されている。▼広江天痴人氏(松江市)は三月十四日松江市の鳥取県婦人会館ホールで開

不朽の人々



茶園を経営される津久岡氏(宇部市)

私の川柳は欲目に云っても決して上手な方ではない。私は川柳の玄関や客問的存在になるよりも茶の間の的でありたいと思う。

全国的に小さな親切運動や国土花いっぱい運動が繰り広げられて居るが、私は川柳を通じて心の花いっぱい、親切運動を押し進めたい。

初日之出真直ぐ生きて来た語り

(六花)

催された木村三雷波還暦祝賀句会に出席、尼縁之助氏、藤井明朗氏らと歓談された。▼山田季賛氏(高槻市)は三月二十八日を子供達のサービスデーに当て、名神高速バスで大阪名古屋間を突っばし、名古屋市内を見物、帰路は新幹線でスピード旅行を楽しませられた。「名神の窓春雲が楽しませ」▼永宗宗義氏(岡山県)は三月十四日大万川柳の大会に出席、十三句も入選して面目をほどこされたが、路郎主幹欠席のためお目にかかれなかったことを心残りに帰岡された。▼高須啞三味氏(東京都)は四月三日の富士野鞍馬古稀祝賀川柳会、四日のきやりの大会、六日の富士の裾野の会、とそれぞれの来客を迎えて寧日なく過ぎた。大陸引揚げ柳人同窓会では大連にいた者が圧倒的に多く夜

は一室を占有し、抱きあって泣いている人もあるという感激的な場面もあって思ひ出話に時のたつのも知らぬ有様でした。右手同士の東野大八君とも二十数年ぶりの感激的なめぐり会ひでした。▼大井正夫氏(姫路市)も四月四日早朝初めて新幹線に乗って大陸柳人同窓会へ。東京では「駒形のだじょう」を賞味、鈴木演芸場で大阪と違った寄席気分を味わい柳人桂枝太郎の落語に酔い、気ままな東京散歩を試みられた。▼大野木真砂氏(神戸市)は最近の作句に自信なく先人のわだちの跡をワロウロする状態なので、一念発起して、「川雉」の古句研究をさかのぼって読み返し、過去の飯場生活八年の体験を回想、その連作に努めておられる。金婚をすまされ、第一

年を踏み出された路郎主幹ご夫妻を祝福して僥倖ながら「菜の花も月も黄金の老夫妻」▼山内静水氏(竹原市)から、「たけはら」百身記念句会に祝電を頂戴し路郎師のご厚情に深謝する旨の寄信があった。又、三月七日の姫路「あしなみ」百身記念句会に出席された。▼越智一水氏(今治市)は四月十日東京、親善団体の会議に出た後、飛田瓢箪坊氏と新宿の夜の街を散策、四五年の間にがらりと変貌した東京には驚くばかりであった。▼小林孤呂二氏(松江市)は四月一日付で都市計画課区劃整理係長に就任されたが、二月には公務のため東京に出張中急性肺炎を突発、四月初旬なお通院加療しておられる。▼梶谷冬生氏(松江市)は、福祉事務所所長を勇退、舟木与根一氏(松江市)は耕地課耕地係長に昇進された。▼野

村味平氏から、「柳縁につながる亀田六角氏が逝去され、親しい柳友の追々と去りゆく淋しさをかみしめております。」▼若本多久志氏(西宮市)は四月十八日「時の川柳」百身記念川柳大会に出席、川柳雑誌社を代表して祝福の意を述べられ、兼題の選を担当された。▼河相すすむ氏(西宮市)と橋高薫風は四月三日相携えて東上、富士野鞍馬古稀川柳大会きやりの大会に出席、富士野鞍馬氏、村田周魚氏を祝福、故塚越迷亭居を訪い、榎田竹林氏夫妻(静岡市)らと故人の冥福を祈り、ご遺族をお慰めした。▼小田無限氏(福岡県)は上京の途次、三月十四日不朽洞を訪問、五年ぶりに路郎主幹と話された。東京では河野春三氏と交歓、柳界三十年の冬眠を自覚された。▼藤井明朗氏(島

根県)は四月四日、木次町合併十周年記念川柳大会で、水客・緑之助・雄々・晃男の諸氏と久しぶりに柳談をたのしまれた。尚水客氏は当夜湯村温泉で一泊された由。

句集

▼三十進著、句集「孫の手」が昭和四十年四月十日広島市庚午南町二丁目九番地の二石原伯峯方から発行した。伯峯氏の序に、二人の愛孫の誕生以来、孫に関する川柳が酒の句を凌駕し、云々とあり、この春国鉄を停年退職する著者の円満さが偲ばれて微笑ましい。「じいちゃんの次にテレビが好きという。」B6版八十五頁非売品。

電話開通

▼木村十悟氏(奈良県)宅に電話が開通した。長尾局五一九番。

転居

▼木村十悟氏は奈良県北葛城郡当麻村長尾、磐城自動車サービスステーションへ転居。▼林野睦光氏は呉市上平原町甲四二(電話21)七六四七番)へ転居。▼松下辰美氏は芦屋市打出楠町一三三(電話三三三三)へ転居。▼月原宵明氏は松山市道後町三丁目三六(電話松(2)三三七五番)へ転居された。(薫)

不朽洞会から

★新会員紹介—五月

▼川端東雲楼(富田林市)正
▼吉岡美房(富田林市)正
以上摩太郎氏推薦(多)

大萬川柳

兼題「小切手」

入選発表

選者 麻生路郎先生
投句総数 四百十七句
入選 四十一句

加賀 味平 小切手で月の生活が届けられ
南河内 白柳 銀行渡り消してやるのを恩に被せ
宮崎 卯之助 小切手の残を氣にして切っており
大阪 琴女 小切手では証拠が残る袖の下
岡山 十九平 複雑な気持ちで小切手見る女
大阪 あいき 仕事着で来て小切手うたがわれ
笠岡 遠二 小切手へつい日曜を忘れて居
笠岡 桃里 小切手で寄附し出馬をはのめかし
岡山 護士 小切手にちびた印鑑親しまれ
加賀 久雄 割勘に小切手出されむとする
東京 泰造

高橋 潮花 小切手の印は先代からのもの
連休で銀行渡りが三日効き
倒産という小切手をつかまされ
呉服屋へ払う小切手妻が切り
大阪 双葉 小切手で一時押えの借りがすみ
小切手で半端は値切ること決め
豊 圭井堂 酔えば直ぐホームエツクを書きたがり
小切手のヘタも汚職は見逃さず
豊中 黙平 叩くだけ叩いて先附け渡しとき
小切手で呉れて肩の荷やや軽く
大阪 金三 小切手でもらい職人よろこばず
大阪 清人 小切手で買物外車乗りまわし
小切手で息子の非行詫びに来る
小切手で貰う派閥の軍資金
富田林 美房

待たされた小切手のさき込んで待ち
小切手も知らない俺れの所得税
和歌山 木魚 文句だけ言うて小切手まだ呉れず
今日金にしたい小切手まごつかせ
西宮 多久志 残のない日は横線で渡しとき
小切手の判は女房が握つとり
奥北 好郎 小切手に約手交えさす腰を据え
恐喝へ書く小切手の手がふるえ
銀行渡り消して貰ったせわしなさ
五 客
高橋 潮花 小切手で来るお手当に馴れて住み
香川 酔夢 パパババと甘えて小切手またせしめ
神戸 どんたく 小切手をちょっと押して帯に入れ
大阪 春葉 小切手の暮し生垣おい茂り
笠岡 桃里 私生児にする小切手の額で揉め
人
大阪 柳志 小切手をヤンシに替えて来たけ目
大阪 梅里 小切手をとっておんなを去に
天
大阪 梅里 横線で一日稼ぐいそがしさ

大萬川柳ベストテン(四月)現在
一 梅里 九、五大阪
二 木魚 六、〇和歌山
三 美房 六、〇富田林
四 桃里 五、五笠岡
五 阿茶 五、五大阪
六 好郎 五、〇泉北
七 潮花 四、五高槻
八 柳志 四、〇大阪
九 どんたく 三、五神戸
一〇 圭井堂 三、五堺
一一 清人 二、〇布施
一二 双葉 二、〇大阪
一三 味平 二、〇加賀
一四 久雄 二、〇加賀
一五 多久志 二、〇西宮
一六 雄々 二、〇米子
一七 十九平 二、〇岡山
一八 琴女 二、〇大阪
一九 金三 二、〇大阪
二〇 黙平 二、〇豊中
(以下略)

次ぎの兼題「怪病」 五句以内
〆切 五月十日
発表 五月二十日
〆切 六月十日
発表 六月二十日
投句先 大阪市阿倍野区松崎町三丁目十
大万川柳会

スマートで
着心地良い

GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

柳箋

書きよい 美しい
投句用

一冊(五〇枚綴)三〇円
送費一冊毎に二〇円

川柳雑誌社
サービス部

今度そ波に乗る氣の潮を待ち
チャルメラがいゝ潮時にきた夜業
潮時を幹事仲居の目で知らせ
盃ふでる潮時俵の目で知らせ
休張るに潮時見逃がさず
退職金今年はキツバリやめる肚
あの時はお高くとり嫁かず後家
潮時を逃がして三十の声近し
潮時を見て辞めますと廻り椅子
潮時に立たせぬ鉄火場の熱氣
独立の潮時来ずに停年来
チップ大け貰うと女そばに居ず
検温を汐時にした見舞客
潮時を知る助産婦はせきもせず
潮時をはかつて見合の氣を利かせ
潮時を下戸心得た腰をあげ
潮時があり団交の手を握り
潮時を社説で知って退陣し
禁煙の潮時という病氣する
潮時を意地が逃した長期スト
潮時と見た転身の鮮かさ
潮時と見たか仲裁腰を上げ
潮時をみてて^アが派手に買い
和解する潮時を子に救われる
汐時も逃して姉の亡母代り
一と通り返盃もして社長消え
永びけば損と見越したスト中止
おくるまが参りました^{ウイミンク}
人垣へやし本職に取りかゝり
曲り角知って辞職の肚を決め
釣竿で浮草あつちへやつただけ
浮草にたとえられてる不倖
浮草も序に購うて来た金魚
都落ちした浮草に咲いた花
半生の浮草ギター襷せてくる
浮草は風にまかせて岸を変え

真破 一
たつみ 女
珠 母
静 歩
よしを 明子
摩太郎 美房
一舟 小松園
句案坊 采
清人 春己
清人 多志志
柳志 白柳
すゝむ 同
圭井堂 清人
美房 金三
梅里 金三
梅里 金三
梅里 金三
進之助 文秋
富題「浮草」 川村好郎選

小松園 すみれ
金三 花梢
天樹 多志志

浮草糸業というてはいるる自信
浮草の飯場へ届く児の写真
浮草のように職場をまた変り
浮草の身空は明日を考えず
マスコミに浮草のように流されて
がめつ貯めて浮草の足洗う
睡蓮に風あり気休め言うてみる
釣たのは浮草だけで針が尽き
浮草のような嫁業で旅に馴れ
浮草の身のやつと落ちつく故郷の家
蛙の青春浮草の上に恋
どうせ浮草ですと不貞腐れ
浮草へ流転の足がふととまり
浮草ですとホステス旦那あり
席題「喰む」八木摩太郎
ガムを噛む耳は意見も素通りし
頭から噛み附かれてる養子の身
毒舌を吐いて狐独の砂をかむ
爪を噛む癖も子供の頃のままだ
ハンカチを噛んで女は諦めめる
若い母乳房噛まれた声になり
噛みそうな顔はしてても惡妻家
窮鼠猫を噛む古諺で説得し
沢庵を噛んで還暦見直をされ
懇々と噛んで含めて旅に出し
唇を噛んで男としてこらえ
アゴのたるは噛んで出した牛肉
ガム噛んで夜ときの席にいる女
片親で育った卑屈が爪を噛み
噛みついてみたが下請けさだめ
後味の悪さへ砂を噛む思い
おかぐらに噛んで貰てる大年増
銀行で待つ間も爪を噛んでいる
ガム噛んでデイトのあとを考へる
裏おもて噛みわけ出来る人格者
ガム噛んで意見聞ける顔でなし
ガムを吐き捨て、やり場の無い怒り

柳志

嘯む才も飼うてどつさり金のため
噛みしめて聞けとじゆす／＼説き始め
風紋の砂嚙むむ岐の桜貝
噛む程に味が出てくるお人柄
家出した養子へ石を噛む思い
石を噛む思いの中の社の人事
師の言葉噛みしむほどに頬がぬれ

摩多郎志澤

花柳 本多柳志澤

ひと廻りして公園の春を出る
もやく／＼を一人で捨てに来たベチ
公園で明かす浮浪へホテルの灯
腕力が無けりや公園近か寄れず
逢うたのも別れ話も中之島
公園の陽なたを選った乳母車
孫連れて来た公園で眼が疲れ
公園の碑文判らん字を彫み
陽が落た公園甘い場所となり
公園の草引きしても食うている
公園のブランコマに見守られ
ふきだめのように公園の空缶集められ

一学馬

静歩

圭井堂

文秋

白柳

弓彦

静馬

柳宏子

圭井堂

瓢太

梅里

同

白溪子

美房

四郎

新配達走り抜け公園朝になり
かくれんぼもう公園に灯がともり

柳志

阿倍野支部句会
(大阪市)

金井文秋報

代役の台詞氣遣う幕の袖
 抱きついて泣くだけ泣いた母の胸
 横綱になる根性へ胸を貸し
 あどけな子の一言が胸を刺し
 育児法才女のはなし理屈めき
 どん底を生きて女に芯が出来る
 代役の方が持ててるとき廻り
 今に気がつくと本妻なだめとき
 気休めを云わずに母は共に泣き
 胸張って歩け今日から職があり
 修繕もインスタントとセメダイン
 損ばかりしてネとこぼれる才女
 素通りをされて落目の身を想い
 胸バツジ飼われて居ます印なり
 どん底に馴れた自分を嫌悪する
 腹痛で来ても胸から診るお医者
 セメダイン空気に触れたのが最後
 どん底の暮しもあって今の地位
 うれしさを女男の胸で泣く
 セメダインもうついている如才女
 十一
 才女の冷たさ
 八

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区源蔵町5 (361) 9373代
支局 東京都千代田区神田鍛冶町2 (252) 4941代
名古屋市中区和区村田町2 (88) 9069

色づいた胸の隆起にギョツとなり
妻として失格才女恋を書き 宗義
才女執筆夫は市場へ子と出かけ 章雅
才女前向き貧弱な政治蹴る 綺史朗
才女なり内の女房日本一 黙平
喜仙

川維 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

三角巾吊つて悪童まだ大将 正彦
スーブ一さじそれからやつと持直し 白柳
スー薄めて増えた人数の間にあわせ 六龍子
スモツグにまざり昇天せにやらず 一舟
真清水と書く水にも出る値打 風仙洞
文明の起源たれば水があり 文秋
水々しい髪に枕の落付かず 静馬
水の色まで由緒ありな古都の池 柳宏子
米粒のように葉書へ長い文 寿美司
初仲人便りの気がいかに 八郎
ブツリと便り出稼から途絶え 章雅
金策がついた便りで良く眠り 三時
住込みの犬の世話まで故郷へ書き 滋雀
母上の便りがお前お前で来 金三
故郷の母近所のことまで書きつらね 一栄
故郷からの便り案じて許りなり 柳宏子
面当てに食べぬ菓子減つてゆき 志津子
待ち呆けアベツ面当てのように行き あいき
見くびった祝を倍にして返し 市郎

川維 京都支部句会 (京都市)

田中局雀報

失敗に加速度がつき店じまい 句楽坊
荒天に沈む錨速度をわすれ 枯粒
歩幅ゆるめるふところに金もち 幸男
性格の弱さが媚を訴える 正男
返えつてこない鏡の中の媚 豊次
教会の前の書店の聖書 司郎
鏡なき書店のなかに佇っている 磯

節にかゝらない粒が一等粉 頑一
一つの粒を胎内に真珠貝の廃退 ゆきら
一粒の砂が再起の靴の中 尚平

川維 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

新婚の甘へる妻を尚愛し 紅茶
我儘も暮しの内と甘えて見 三石
我儘を云われて嬉し生さぬ仲 斧平
我ま、も知つて見送るは老け 雪女
我ま、も男の場合は大目に見 カロ女
よく嫁ぐ妻の我儘通しとき 泉水
我儘は平気戦後の若い嫁 梓山
我道を行くと左右を顧みず 浅太
我ま、を承知の若い妻を持ち 晚舟
一人息子親困らせる手だけ知り 平八郎
我儘な俺に子が似て孫が似て 河童風流
浮気して妻の我儘きいてやる 魔花麗
我儘で別れたものの後淋し 同
我儘を言えぬ他人の飯を食い 柳葉
我儘を叱ればヒスと早変わり 快夢起
下心あつてひそかに後家の世話 あき坊
愛書家の好奇をそゝる野心作 柳葉
パトロンの野心覚悟で金を借り 泉水
未亡人他人の親切怖くなり 紅茶
野心家と見えぬニコニコ低姿勢 蒼蛇様
親切を小出しに本心押しかくし 峯田
水心あつて社長は茶へ誘い 万里歩

川維 岡山支部句会 (岡山市)

浜田久米雄報

納税の長者になつて繁盛し 笹舟
余る程取つとき調整取りに来い 宗義
申告を忘れた春の煮湯飲む 知水
税金がからぬ旅費はすぐに消え 柳五郎
税金が飛びまわつてる年度末 基弘

町民税はつきりさせる町境 伊久野
酒の税金句も言わす納められ 胡風
税金が物見遊山をする世界 あきら
二日酔いして税金の日が周近 博友
税金は出さぬがこの世にある不満 天龍
税金に泣いても店舗はひろげられ 照路
滞納も出来ぬ律気を見直され 佐加恵
医療費が泣き税金が微笑する 護士
税金を損したような顔で出し 三平
税金へ汚れた札を還つて出し 鯨虎狼
税金でまかないました市長賞 始ん坊
血税が汚職へ回るとも知らず 哲郎
二次会へまで税金を出しに行き 久米雄

川維 備前支部句会 (岡山県)

横山一声報

これからを見て下さいと四十代 久米雄
四十代だまって俺について来い 正洲
白足袋がビツタリ女四十代 鯨虎狼
転んでも只では起きぬ四十代 良江
職安で四十代を意識する 秋月
四十代少々無理をして儲け 浄美
妥協することも覚えた四十代 柳風子
行く水の帰るともない四十代 君子
世が変り花もつほみの四十代 芳月
四十に夢あり柿の苗植える 胡風
呑む酒に酔うてはおれぬ四十代 拙望
四十代PTAで活躍し 美枝子
号令で動いた四十代の過去 千秋
たくわえはこれから言う四十代 伊久野
同窓の格差がきまる四十代 娘句楽
貧乏を守りとおして四十代 鼓山
喉もとて啖呵おさえて四十代 あきら
初孫が背中にうれし四十代 静子
暖い言葉に飢えた四十代 鈴ん坊
四十代わが子の年をかぞえてみ 卓久
四十代業のことをよく気にし 笹舟

川維 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

税務署はすぐに感づく金廻り 芳子
買物の籠が知つて金廻り 正夫
金廻り顔の血色左右する 孝華
金廻りその中何んとか成るだらう 清夢
金廻りマダム抜け目のない素振り 輝水
中小企業活殺自在金廻り 尚州
来客の向き変えさせる隙間風 昌
二年目が世話をやいてる新入社 酔陶子
新入社酒の要領教えられ 明朗
災害に様を付けてる土建業 勇

川維 宇部支部句会 (宇部市)

安平次弘道報

日記にも符号で書いたデイトの日 わか子
給料前デイトも寒く只歩き より子
念を押す又のデイトを別れ際 一考
初めてのデイト子よりは気さうかい かつ子
太陽もママも認めているデイト 南風
満月が初なデイトへ邪魔がられ 六花
月給前歩くだけでも良いデイト 章雅
金を借りカメラも借りて行くデイト いさ夢
花いっぱい出来て附合広くなり 利子
とき汁も捨てず花いっぱい協力し 玲子
花植えて交通事故もドンと減り 羊蔵
とき残りですと花の種を呉れ 東村

花いっぱい空地へよい子の鈴が寄り
脚線美充分意識してポーズとり
脚線美年甲斐もなく気が動き
脚線美和服着るのが惜しいよう
ハイヤーを呼び馴れてる脚線美
袴足の白き喪服の未亡人 難足
素空

川維 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

仲人の旧悪を知る若夫婦 夢迎
朝の膳娘の関心もインドシナ 桂緑
現実を見ろと若さをあしらわれ 夢生
公園でピースの箱へ句を拾う 大破
卒中で死んだ隣りと同じ年 勝子
馬売ってから青草が目につかず 窓月
春うらら女縁が生きてくる たかし
野に山に呼んでる春を酒にする 勝喜
合格の知らせ春田を駆けぐる 房江
約束の柄を探すに妻を連れ 未遂
貧しくも正義の味方持ちつづけ 蟬蛇
子供等を味方に母の座が強い 一步
二三回飲まして味方にしたつも 松風
新世帯敵も味方もある困地 天花

川維 大鉄支部句会 (大阪市)

辻白溪子報

マンモス化した予算汚職も派手になり 万の
マンモスダム悲劇はとうに忘れられ 杜的
金持って死ぬ根性で身を守り 永断
成りゆきの前後も聞かず大喝し 求女
身内だけ残ってくれた前後策 たつみ
前後つかえた儘で平の椅子 一香
栄転の辞令夫婦だけで見る 醉華
ふみつけた草そのままで育ち 宗悟

身を守る言葉は頑としてひかず 白溪子
マンモスのラックの無気味な埋立地 耕三
寝姿が育てる苦勞忘れさせ 良夫
寝姿のストレッチ並べてリバイバル 高王
寝姿にはろりとしてる見舞客 よしを
スカートを傘に開いたトーグレンス 風仙洞
お茶室のスカート膝をのぞかせる 草右
ガムを噛む若き二人の理想論 宏子
ガム噛んでくいらく時間待ち 愛論
はち切れる若きスカートに押し包み かをり
晩酌は勝手にしてと倦怠期 竹莊
孫ひざにのせて晩酌うれしがり 没食子

森下愛論報

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

昇給に甲乙同じ勤務して 貴山
昇給は総評幹部が決めてくれ みなつき
昇給のうわさ女将の口すべり 宏子
ペン書きの昇給辞令で味がなし 烏莊
昇給のタイミグよく子が生れ 圭水
病床の友へ昇給言いそびれ 和郎
昇給を彼の女にだけはもらすなり 路郎

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

長話し湯ざめ仲よく湯にもどり 半月
湯ざめをも忘れる程のよい番組 ふみ子
家内中湯ざめをさせて近火すみ 柳太
生命線みちかい管が長生きし 重子
手相でも出世しそうでない俺だ 摩太郎
病床に手相の本も置く迷い 吸江

あすなる川柳会 (大阪市)

山本素郎報

金のない同志で春の風を褒め 好郎
着ぶくれが転んだ春の風の中 素郎
世の中は善と悪との抱き合せ 常夫
割り込みをされて無言の眼で抗議 双楽
割り込みは文句言ひ言い押し込まれ 弓彦
割り込んでみたらタワシを売っていた 尤三
割り込んできたのが一人まじくした 福郎
ベタランのしくじり運が悪かった 百酒
ベタランの真似をするから怪我もする ゆきを
質草はみんな流して卒業し よしを
中卒を鉦や太鼓で迎えに来 恵美子
中退を卒と履歴に書いておき 梅里

コクヨ川柳会 (大阪市)

山口理休報

豪語するその足もとのボロ靴よ ルミ
ぼろ靴のお蔭で軽くあしらわれ 八苦

ボロ靴を磨く妻の手ひび割れて はたる
ボロ靴になるひまもなく型かわり 広彦
ボロ靴といえは終戦思いだす 武
養子の児器用に祖母になつて 理休
器用さが村の役場に居着かせず ルミ
器用さがかわれ会計まかせれず 昭一

城北明老句会 (大阪市)

田中多幸報

春来れど団子上手の母の味 繁子
新妻の初の料理の味を賞め 源川
お見合で何を喰べたか覚えてず 弘生
六十路過ぎ味衰えぬ有難さ 濁水
しぐい歌味かみしめて聞く文句 清記
家計簿に買った指輪は書てなし 生弘
家計簿で妻のやりくり良くわたり 充
家計簿を見て女房は見直され 一登
かあちゃんのは家計簿付けの 芳
やりくりの言訳家計簿だけは付け 富士
家計簿の赤字へ頭いたくなり 久江
家計簿へレヂヤをきめて赤をうめ 久子
チョイ黒字ベリースアップの当座だけ 多幸

宴會・出張パーティ・折詰弁当

梅里ノ店

大萬

料亭

阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL(六三三)三九三五番

TEL(六三三)七七八二番

TEL(六三三)〇一四七番

南区豊屋町三ツ寺センター
TEL(二三三)九一八四番

串の店

アベノ橋近映地下食通街
TEL(六三三)〇一四七番



柳樽室

☆路郎先生が大阪赤十字病院へ御入院中とのお電話を、若本多久志氏から頂いて私は驚いた。

大阪赤十字病院には元大阪通信病院副院長の若林草右博士がご勤務になって居り、博士のお勧めで、先生は三月卅一日に入院されたのであった。その頃私は内科学会総会出席のため東京に居り、その事を少しも知らなかった。私は若林博士と主治医の同病院内科副部長の石川博士の両博士から、先生の病状の説明やら検査事項の結果などを聞いた。御病氣は「単純性黄疸」と呼ばれ、最近では医学が発達したため呼び名が変

り、「ビールス肝炎」といつている。先生は入院前から全身倦怠感が強く、そのため、東京での「川柳きやり吟社四十五周年、周魚主幹喜寿祝賀会」に出席の予定も、三月二十日になって東上を中止される決心をされたので、ご病氣はその頃から出かけていたものと推定される。

ビールス肝炎は人により、重さによって違うが、全治までには一カ月から三カ月を要する病氣であるが、先生のご年齢と、平素のご無理が重なっている御体とから考えて、或は若い元気な人よりは多少ながくかゝるかも知れない。それに先生は病氣が癒えたら、この際、人間ドック式に全身の検査も受けたいとおっしゃっていた。ただ永く入院することでご心配となっているのは、雑誌のことであった。然し、今そのようなご心配をされることは、病氣の経過にも悪い影響があるので、そんなご心配はなさらぬよう、療養ひと筋に専念して頂きたい旨を申しあげて引下がった。

私は医者として、此の病氣の性質上、いくら焦っても全治へは一三カ月位の日数を要するものであることを御報告申し上げたい。また、副主幹として読者諸賢へ、雑誌の遅刊は今少しご辛抱を願ひ、一日も早く先生のご全快を祈って頂くようお願いするものである。

(春集)

☆路郎の病氣療養の期間は相当水びくようであるので、我々留守部隊は長期戦を覚悟して、極めて合理的にエネルギーの消耗をはかってゆかなければなら

ないのであるが、案じるより産むが易いで、幸に、「川柳初編研究」「江戸川柳と紋章」「川柳太平記」「明治川柳と風俗」そして東野大八氏のユーモラスな随筆で毎号誌上を賑わせているし本

ハンディな生ビール



アサヒ
スタイナー

1本 65円

献身的なご努力に、おのずから頭が下がるのである。高須啞三味氏の「迷亭終焉記」にも川柳人の温かい魂が溢れていて、川柳こそ人間陶冶の詩である事を切実に思われるのである。「鯉職又はメーデーの思い出」のアンケートはそれぞれのカラーの出ている回答で面白い読物になっている。編集室にはいつも顔を見せて組込みを手伝って下さる摩太郎氏があり、入門講座で指導研究を担当して下さいる白柳氏があり、柳界展望をまとめて下さる薫風氏がある。総務部には稻妻のように働く宏子さんがいる。句会部では永年面倒を見て下さっているいさむ氏があり、忙しい中から馳せ参じて下さる柳宏子氏、八郎氏、庸佑氏がある。こうした暖かいステイムに囲まれて留守番をしている私の幸福を感じている次第です。なお今後とも御執筆、御支援をお願いします。

(腹乃)

☆去月四日の「きやり」四十五周年のお祝いと村岡周魚先生の喜寿のお祝を兼ねての句会へ久しぶりに、皆様にお目にかかれるのを楽しみに、上京のご準備中だった本社主幹は、疲労の度が重なり、この度入院されることになり面会謝絶のはり紙で療養されています。腹乃先生も病院と家事と、社の雑務でお忙しいので、おからだをこわさぬようお祈りするばかりです。不朽洞句帳」にはいつものように主幹より句をいただきました。こころを味読される事と思います。編集局はその留守をまもって、懸命に努力しております。なお一層のご支援をお願い申します。主幹の病氣をふっとばすような素晴らしい原稿や句を期待しております。

(宏子)

☆川雑支部句会・五月★宇部句会・9日(日) 一時、題、太る・鯉職り・タマゴ・銅う・所、宇部市東区恩田長沢津秋六花居、★玉造句会10日(月)六時半、題、転勤・評判・メーデー、所、市電玉造南百米、大阪信用金庫、★阿倍野句会・20日(木)六時、題、目的・効め・大切・タイプ・所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割京大萬、★京都句会・16日(日)夕、題、入陽・嘴・押す、所、京都市上京区相国寺北門前上ノ町田中鳥雀居、★明和研究句会・9日(日)一時、題、人形・旨い・葉桜・所、阪神鳴尾駅下車東南二百米鳴尾公民館、★かがみ句会・2日(日)夜、題、叩く・出稼ぎ・大黒柱・へらざ口・田舎町・所、池田古心居、★富柳句会・16日(日)一時、題、待合・洗濯・甘える、所、富田林公民館、★南海電鉄句会・20日(木)六時、題、下見・一軍・追加、所、難波高架下新和クラブ。

種 目
チエロ・特設バレエ科
バイオリン・ピアノ・声楽・

C・M・C 児童音楽サークル

千 林 教 室
大阪市旭区北清水町九六
あびこ教室
大阪市住吉区南住吉四ノ一
西 九 条 教 室
大阪市西九条
生 駒 教 室
奈良県生駒町北新町

北清水集会所 バイオリン科
あびこ幼稚園 バイオリン科 電話1874
防 犯 会 館 バイオリン科 電話9836
文 化 会 館 生駒2027

主 宰 麻 生 ア ー ト
奈良県生駒町生駒本町1031
★サークルに関するお問い合わせは右記へ
電話生駒 〇四三七 二二二七

高鷲亜鈍著

川柳 詩川柳考

B 9 型函入

価380円
送費90円

★著者は曾て創生期ごろの超現実主義者であったがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した—今は柳会にあって庶民の詩人的自覚を促す—ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る—凡そ前向作家を白くする柳俳人必読の書。

東野大八著

風流 人間横丁

B 6 型二五八頁

価 250円
送費70円

★異常な戦争にまきこまれ隻手となって帰還した著者のザックバランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄い。まるで腕の冴えた板前の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

橘高薫風子著 麻生路郎序

川 柳 句 集



価 250円
送費60円

▲著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入って採まれ、川柳編集部員として精進を続けている前途ある好作家である。

★この送金は振替口座をご利用が便利で安全です。(切手代用可)

発行所 大阪市住吉局区内
万代西5丁目25

川 柳 雜 誌 社

振替口座 大阪 75050
電話 大阪 〇6081

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

あ 借 着 戸田古方選
砂 長野井蛙選
(十句以内)
(十句以内)
(十句以内)
(十句以内)
(五月十五日締切)

返 済 ニ緑之助選
イミゲイシヨ 西森花々選
レ ベル 小西雄々選
(十句以内)
(十句以内)
(六月十五日締切)

近作柳梅 毎号募集

川 柳 塔 北川村好郎選
章 (評論・研究・感想其他)
(五月十五日締切)

投稿規定

▼ 投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記すること。
▼ 「近作柳梅」は一般作家の雑吟を募る。
▼ 「課題吟」「方円帖」は誰でも投稿が出来る。
▼ 「川柳塔」の投稿は不朽洞会員に限る。

川柳雑誌 第四十年
定価 一〇〇円 (送料六円)

(禁転載)
半力年 七五六円 (寄)
一力年一、四四〇円 (寄)
昭和四十年四月廿五日印刷
昭和四十年五月一日発行

発行所 川柳雑誌社
大阪住吉局区内万代西五丁目二五番地
行印刷人 麻生幸二郎
電話大阪(六七一)六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番



国立 奥新和歌浦・雑賀崎
風光明媚な海岸美を誇る
国際観光旅館

うおまたろ
魚又楼

TEL 和歌山 ④ 0431・0387



中外製薬

体力と
気力に

●オルパをのめば基礎体力がつく●気力が盛んになります。

錠剤とDドリンクがあります。

(毎日新聞評)
麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう六十余年にもなる。この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとした

川柳の味わい方・五百数十句

新川柳鑑賞

麻生路郎著

好評噴々

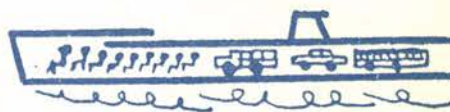
句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

価二五〇円
送費八〇円
B6版
二五〇余頁

大蔵市住吉区西五丁目二五番地
発行所 川柳雑誌社

電話大阪(671)六〇八一
振替口座 大阪 七五〇五〇

南海四国ライン
毎日7便 小松島へ
3時間45分



なんば発	7.45	和歌山港発	9.00
なんば発	8.40	和歌山港発	10.20
なんば発	10.40	和歌山港発	12.00
なんば発	14.10	和歌山港発	15.30
なんば発	15.15	和歌山港発	17.00
なんば発	17.40	和歌山港発	19.00
なんば発	—	和歌山港発	3.30

お問合わせ
(641) 8686

南海電車